97-213

露國征討日誌

松本隆海編

明治三十七年七月

明治
37 8 17
内交

露國征討日誌目次

(一)日清戰役後九ヶ年誌

明治廿八年誌……一頁
明治廿九年誌……二頁
明治三十年誌……三頁
明治卅一年誌……三頁
明治卅二年誌……四頁
明治卅三年誌……五頁
明治卅四年誌……六頁
明治卅五年誌……七頁
明治卅六年誌……八頁

(二)明治三十七年上半期誌

第壹月誌……十七頁
第二月誌……廿一頁
第三月誌……四十三頁
第四月誌……六十頁
第五月誌……八十三頁
第六月誌……從百三十頁至百九十五頁

露國征討日誌

日清戰役後九ケ年誌

明治廿八年

明治二十八年

四月十七日　馬關に於て日清平和條約締結せらる。

同　廿三日　露佛獨三國遼東還附を勸告し來る。

五月五日　勸告の承諾を露佛獨三國に通知す。

同　十日　遼東還附の詔勅下る。

七月七日　韓廷日本黨の首領たる大臣朴泳孝を逐ふ。

十月八日　半島の日本黨大院君を奉じて王城に入る。王妃閔氏の殺死。

十一月八日　日清間に於ける遼東還附條約締結。

同　廿八日　露國黨金宏集内閣を顚覆せんとの計画失敗に歸す。

明治二十九年

二月　露帝七年繼續八億留の海軍擴張費支出を批准す。

二月十一日　朝鮮の露國駐韓廷を取り、朝鮮王露國公使館に走る。

同　十八日　露清銀行開業。

三月　帝國議會第二期軍備擴張案を通過す。

五月十四日　小村ウェーバー京城議定書成る。

五月　韓廷日本式軍制を廢す。

六月　韓廷露國式を以て其軍隊を訓練す。

同　九日　山縣ロバノフの朝鮮に關する日露協商成る。

八月廿七日　露清銀行清國間の東清鐵道敷設契約成る。

九月卅日　カシニー駐清露公使及清廷間の露清密約あり。

十一月　中國鐵道公司即ち東清鐵道會社設立さる。

十二月　露國膠州灣を冬季間借入る。

明治三十年

三月十六日　帝國議會第二期軍備擴張案を通過す。

四月　露國韓廷に武官百五十名の傭聘を迫る。

七月　露國士官三名下士十名韓國京城に着す。

九月六日　韓廷露國士官三名下士十名を傭入る。

十月六日　露國韓國に財務顧問官傭聘を申込む。

同　廿六日　韓國傭聘期限中の財務顧問官英人ブラオン氏の解傭を英國領事に通知す。

十一月十四日　獨逸膠州灣を占領す。翌年一月十一日遂に之を租借す。

十二月十八日　露國軍艦旅順口に入る。

同　廿八日　英國艦隊韓國仁川に現はる。

明治三十一年

二月十一日　英國清國に揚子江地方不割讓を約せしむ。

三月廿七日　露國旅順口大連灣一帶を租借す。
四月二日　英國威海衛を租借す。
同　六日　佛國廣州灣を租借す。
同　廿三日　日本清國に福建省不割讓を約せしむ。
同　日　米國西班牙戰爭開始さる。
同　廿五日　韓國に於ける日露第二協商成立韓國問題一段落となる。
七月　露國旅順口を二等軍港とす。
八月　列國爭うて清國に鐵道敷設權を要求す。
十二月十日　米西媾和成る。

明治三十二年

四月廿八日　清國に於ける勢力範圍の英露協商成る。
九月一日　露國遼東に關東省を置きアレキシーフ中將關東省總督兼太平洋海軍總司令官に任ず。

明治卅三年

同　廿二日　米國支那の門戸開放を提議す。

明治三十三年

二月　露國極東艦隊に戰鬪艦三隻、巡洋艦三隻、砲艦一隻、驅逐艦十隻、運送船二隻の增遣を命ず。
三月　義和團匪起る。清國開放宣言の成立。
同　卅日　露韓馬山浦に關する約束成る。
六月十日　シーモア提督各國水兵を率ゐて天津北京に向ふ。
同　十一日　端郡王總理衙門首席大臣となる。我が杉山書記生殺さる。
同　十七日　聯合軍太沽砲臺占領。
同　廿三日　聯合軍天津占領。
七月十四日　露國滿洲に特別運動を開く。
八月十四日　聯合軍北京救援。
同　廿五日　露國宣言。

十月十六日　北清事變に關する英獨條商成る。
同　廿六日　北京使臣會議を開く。
十一月　第一露清密約、第二露清密約共に確定せずして破る。
十二月廿二日　列國會議公文書を清國媾和委員に與ふ。

明治三十四年

二月　第三露清密約の進行。
四月五日　露清特約撤去の宣言あり。
五月十二日　露國鐵道經營の爲四億二千四百萬フランの公債を募る。
八月　露國極東艦隊に甲鐵艦一隻驅逐艦二隻を加へ、地中海艦隊に甲鐵艦一隻を加へむとす。
同　四日　露國黑龍江省へ二萬人を移住せしめむとすと傳ふ。
九月四日　北京條約調印。
同　十八日　露國東亞通商貿易通報局を置く。

明治卅四年

九月　第二露清特約破棄さる。
十一月三日　東清鐵道完成。
卅四年　を以て我が第二期海軍擴張完成す。

明治三十五年

一月七日　清帝北京に還る。
同　卅日　日英同盟成る。
三月廿日　露佛日英同盟に對する宣言を爲す。
四月八日　露清間の滿洲撤兵條約成立す。
六月一日　英國の南阿事件終局。
十月八日　露國滿洲第一期撤兵を實行す。

明治三十六年

四月八日　露國滿洲第二撤兵期日。露國撤兵せず。
四月十六日　露國駐清代理公使ラムズドルフ氏右條條の要求を清廷に出す。

同　十九日　露國遼東軍及び太平洋艦隊司令長官アレキセエフ中將海軍大將に昇任す。

同　廿一日　内田駐清公使（康哉）清廷に警告す。

同　廿三日　日露交渉開始さる。

同　廿八日　露國陸軍大臣クロパトキン將軍極東視察の途に上る。清國。露の要求を拒絶す。露國代理公使更に要求を出す。

同　卅日　露國外相米國に滿洲開放の証言を與ふ。

駐清英公使清廷に警告す。

五月二日　此頃韓國鴨綠江畔森林採伐問題起る。

同　七日　露人六十清人四十韓人八十鴨綠江口の龍巖浦より來り。土地家屋の買入をなす。

同　一一日　露公使清廷に迫る。

同　十二日　クロパトキン將軍東京着。

同　十六日　此頃清國慶親王露公使ポロチロフ氏と會して、日英公使を避く。

同　十八日　内田公使奉天大東溝の開放を促し、露國要求の拒絶を勸む。

駐清英公使又清廷に警告す。

同　二十日　露清密約成立の報を傳ふるものあり。

露韓龍巖浦租借協定成る。

六　月廿三日　第一御前元老會議。

同　廿五日　内田公使清廷警告す。露國增遣艦隊旅順着。

七　月一日　青沈窪稅關開始。

同　六日　露國安東縣より龍巖浦に至る海底電線敷設中。

太平洋海底電線全通。

同　七日　露國極東文武官の旅順大會議。

同　十一日　内田公使の警告に對し、慶親王露國の要求を斥くべしと證

言す。

同　十二日　露國滿洲兵備を決す。

同　十八日　駐韓露公使義州開市に反對す。

同　廿八日　クロパトキン將軍露京歸着。

同　下旬　栗野駐露公使露國外相ラムスドルフ伯と滿洲に關する協議を開始す。

八月五日　清國御前會議。

同　九日　對露同志會成る。

同　十一日　林公使（權助）韓廷に警告す。

同　十三日　露國極東總督府を開きアレキシーフを總督となす。

同　十六日　林公使龍巖浦租貸を韓廷に抗議す。

同　十八日　清廷日米に通商條約調印を第三期撤兵後にせむと請ふ。

同　二十日　韓廷龍巖浦假租貸協定の破棄を通知し來る。

同　廿六日　露公使龍巖浦新協定案十二條を出す。林公使强硬なる抗議を爲す。

同　卅一日　露國藏相ウヰッテ氏國務大臣會議々長に轉じ、露西亞銀行總裁プレスケー氏藏相となる。

九月六日　小村外相（壽太郎）露公使ローゼン男と會見す。露國清國に要求を出す。

同　八日　米公使清廷に安東縣開放を要求す。

同　十日　內田公使清廷に警告す。

同　廿三日　駐日露公使ローゼン男旅順に向ふ。

同　廿九日　悉伯利鐵道佛國より日本支那に至る郵便物輸送を開始す。

同　卅日　日清通商條約談判結了。奉天大東溝の開放を諾す、北京は撤兵後の開放を諾す。

同　三日　ローゼン公使旅順より歸り、小村外相と第一會見をなし、

初めて露國の對案を示す。是より日露談判地東京に移さる。

同　四日　韓廷龍巖浦開放勅告を斥ゝ。閣議。

同　五日　閣議。對露同志會大會。
露國龍巖浦山に砲臺を築く。

同　六日　閣議。

同　八日　小村ローゼン第二會見。
滿洲第三撤兵期。露國撤兵せず。
龍巖浦砲臺築造に關し露國に抗議す。
小村ローゼン第三會見。
日清通商條約調印。

同　九日　旅順船渠備邦人解雇さる。

同　十二日　兒玉男(源太郎)參謀本部次長となる。

同　十三日　第二元老會議。

同　十四日　小村ローゼン第四會見。露獨條約の說を傳ふるものゝ。

同　十八日　露國極東特別委員會組織の勅令を發す。

同　十九日　東郷中將(平八郎)常備艦隊司令長官となる。

同　廿五日　第三元老會議。

同　廿六日　小村ローゼン第五會見。

同　廿八日　露國再び奉天府を占領す。

同　卅日　小村ローゼン第六會見。我が修正案を露國に示す

同　卅一日　小村ローゼン第七會見。

十一月四日　露獨二帝會合。

同　十日　駐韓米國代理公使龍巖浦開放を警告す。

同　十一日　小村ローゼン第八會見。

同　十二日　極東總督府内に黑龍江管區關東省管區を置く。

同　十三日　旅順防備竣工。

同　十七日　駐韓米國公使龍巖浦開放の警告を爲す。

十二月二日　露國增遣艦隊旅順着。

同　五日　第十九議會召集。

米公使龍巖浦開放を韓帝に白す。

同　十一日　衆議院彈劾奉答文の爲に解散。

小村ローゼン第九會見。露國の回答來れる也。

同　十三日　首相邸會議。小村ローゼン第十會見

同　十五日　英國極東問題の爲に內閣會議。

十二月十六日　第四元老會議。最後の提案を送るに決す。

同　十八日　露國は淸國のみと滿洲問題を決せむとす。

同　廿一日　小村ローゼン第十一會見第一最後通牒を露國に送る。

同　廿三日　露國に回答を促す。

同　廿八日　臨時閣議。

臨時樞密院會議。

日本政府決意を示す。緊急支出の勅令、戰時大本營條例、

軍事參議院條例、京釜鐵道速成令、臺灣居住軍人戰時召集

會を公布す。

同　廿九日　桂首相邸の軍事會議。

同　卅日　帝國南米亞爾然丁國の軍艦二隻を購入す。

露國征討日誌

(二)三十七年上半期

第一月

一月一日　新購入艦に日進春日と命名ず。近衛霞山公薨去。

一月三日　極東總督アレキシーフ大將に特定の將旗を授け十二發祝砲を受くるの權を與ふ。

一月四日　參謀本部に於て各將校秘密會議を開く。

一月五日　軍機軍器に關する記事の新聞記載を禁ず

一月六日　小村ローゼン第十二回會見。露國回答來る。臨時閣議。

一月七日　露國增遣軍艦戰闘艦ニコライ一世(九六七二噸)驅逐艦アッベーの二隻極東に向て出發す。露國水兵二十名士官一名韓國京城に入る。

桂首相、小村外相、山本海相、寺内陸相等秘密會議。

一月八日　桂邸密議。大山元帥參內。

露國水兵四十七名韓國京城に入る。英國水兵二十二名韓國京城に入る。

伊國水兵廿一名士官一名韓國京城に入る。

一月九日　新購入艦日進及春日伊國セノアを發し、回航の途に上る。臨時閣議。

一月十日　清國日露開戰の場合に中立するに決す。海相邸密議。

一月十一日　第五元老會議。藏相邸財政密議。

日清條約批准終了す。

一月十二日　露國水兵廿六名士官二名韓國京城に入る。同時に士官一名水兵廿二名京城より仁川に下る。

第二御前會議、露國に送るべき最後の提案を議す。

一月十三日　獨墺伊三國は、日露開戰の場合に嚴正中立するに決すと傳ふ。

露國水兵廿四名士官六名韓國京城に入る。

小村ローゼン第十三回會見。日本露國に第三の最後提案を送る。

一月十四日　各元老、滯京の御沙汰あり。

米清通商條約批准交換。

一月十五日　野津陸軍大將(道貫)、井上海軍大將(良馨)、黑木陸軍大將(爲禎)、奥陸軍大將(保羣)、軍事參議官に補す。

郵船會社東洋汽船會社、次航より歐洲、孟買、濠洲、米國航路を中止す。

米國政府滿洲駐在領事を任命す。

一月十六日　米國水兵六十二名下士二名韓國京城に入る。

一月十八日　內田駐清公使清廷に警告す。

山本參內。佛國水兵下士卒卅九名、露國將校三名貨車六十個京城に入る。

一月十九日　曾根藏相京濱の銀行家を官邸に招く。元老皆東京に集る。

此頃韓國忠淸全羅慶尙の暴徒蔓延の報を傳ふ。

內閣會議。

英國水兵十五名、士官一名、韓國京城に入る。

一月廿一日　樞密院會議。小村外相參內。

清國開戰の場合に中立するに決す。

日本政府英米獨佛四國に仲裁謝絕を聲明す。

一月廿二日　露國戰備の報頻りに來る。

一月廿三日　韓國歐洲各國に向け日露戰爭の場合に嚴正中立を守るべき事を宣言す。

一月廿四日　小村外相參內。

一月廿五日　海面防禦令公布。大山元帥參內。

一月廿六日　鐵道軍事供用令公布。

英國內閣會議。

栗野公使に訓電して露國に回答を促さしむ。

軍事參議官會議。山縣有朋參議會議長となる。

第六元老會議。戰時財政計畫の爲め也。

露都の特別大會議。日本の最後通牒を議す。

一月廿七日　桂首相參內元老會議の結果を伏奏す。

一月廿八日　伊藤山縣松方三元老參內。

桂首相邸の銀行家招待。

一月廿九日　桂首相邸の實業家招待。小村外相參內。

一月卅日　第七元老會議。戰鬪艦二隻の製造を英國に注文す。

第二月

二月一日　開戰の場合はクロパトキン將軍露國陸軍を指揮すべしと傳ふ。

二月二日　日進春日新嘉坡に着す。

內閣々議。

二月三日　英國議會開會。

悉伯利鐵道は軍隊軍需輸送の爲め商品の輸送を禁ず。

第八元老會議。桂首相小村外相參內。

旅順の露國艦隊大擧出航す。

補鹽斯德戒嚴令。

第三回御前會議。軍事的自由行動を取るに決す。

臨時閣議。伊藤參內。

桂首相の貴族院議員招待。

露國宣戰布告及敵對行爲を始むる權利を極東總督に附與せりと傳ふ。

露兵三萬韓北義州の對岸に聚まれりと傳ふ。

出港の露國艦隊旅順に歸る。

軍事郵便の緊急勅令。軍事郵便規則。軍事郵便爲替規則發布。

小村ローゼン最後の會見。國交斷絶の告知を爲す。

帝國政府の電訓により在露京栗野公使は左記の趣旨の公文をラムスドルフ伯に送付し、日露外交の斷絶を宣告せり。

日露外交斷絶の宣告

二月五日

二月六日

日本皇帝陛下の特命全權公使たる下名は本國政府の訓令に遵ひ、露國皇帝陛下の外務大臣閣下に對し左の通牒を爲すの光榮を有す。

日本國皇帝陛下の政府は韓國の獨立領土保全を以て自國の康寧と安全との爲めに緊要缺くへからざるものなりと思惟す故に如何なる行爲たるを問はす苟も韓國の地位を不安ならしむるものは帝國政府に於て之を看過する能はす

露國政府か韓國に關する日本の提議即ち帝國政府に於ては之が採用を以て韓國の存立を確實にし竝に該半島に於ける帝國の優越なる利益を擁護する爲め緊要不可缺と思惟する提議に對し到底妥協の望なき修正を提出して執拗に之を拒絶したること竝に又露國か其清國との條約及滿洲地方に利益を有する他の諸國に對し累次與へたる保障の存在するに拘はらず依然該地方の占領を繼續し爲めに甚しく侵迫を蒙れる滿洲領土保全の尊重を約するとを執拗に拒否したるとは帝國政府をして自衛の爲め其取るへき手段を愼重に考量するの已むを得ざるに至らしめたり。

露國に於て平解し得へき理由なくして屢次回答を遲延し加ふるに平和の

目的とは調和し難き軍事的活動を爲せるに過はらず帝國政府か現交渉中用ひたる耐忍の程度は其露國政府との關係より將來誤解の一切の原因を除去せんことを忠實に希望したることを十分證し得て餘りありと信ず而も帝國政府は其盡力の結界帝國の穩當且つ無私なる提案若しくは又絶東に於て鞏固且つ恒久の平和を確立するに近き如何なる他の提案に對しても露國政府の同意を得ることは毫も其望みなきを領得したるか故に現下の徒勞に屬する談判は之を斷絶するの外他に選ふへき途を有せす

帝國政府は右の一途を採用すると同時に自ら其侵迫を受けたる地位を鞏固にし且つ之を防衛する爲め竝に帝國の既得及正當利益を擁護する爲め最良と思惟する獨立の行動を取るふとの權利を保留す

日本國皇帝陛下の特命全權公使なる下名と本國政府の訓令を遵奉し全露西亞皇帝陛下の外務大臣閣下に對し茲に左の通告をなすの光榮を有す

日本帝國政府は露西亞帝國政府との關係上將來の紛糾を來すへき各種の

我艦隊の出發

二月七日

二月八日

二月九日

原因を除去せむか爲め有らゆる和協の手段を盡したる其効なく帝國政府か極東に於ける鞏固且恒久の平和の爲めになしたる正當の提言竝に穩當且無私なる提案も之に對して當さに受くへきの考量を受けす從て露國政府との外交關係は今や其價値を有せさるに至りたるを以て日本帝國政府は其外交關係を斷つふとに決定したり。

下名は更に本國政府の命により來る　日を以て帝國公使館員を率ひて露京を引揚くる意思なるを茲に併せてラムスドルフ伯に通告するの光榮を有す

東鄉司令長官の率ゆる我艦隊は本日を以て佐世保港を出發韓海に向ふ。

韓海にて露艦マンヂユリヤ、アンゲル、ロシヤの三隻を捕獲す。

臨時閣議。外交顚末發表。

樞密院會議（戒嚴令實施の件に付て）

臨時閣議

仁川沖海戰

十日午前零時十五分仁川港外旅艦浪速に於て瓜生第二艦隊司令官發の報告に曰く九日正午露國軍艦ワリヤーク及コレーツ仁川港より出て來る、我艦隊之を八尾島以西に邀擊す、砲戰三十五分の後、彼れは仁川港に退却せり、午後四時三十分コレーツは爆發し、其後ワリヤーグ及露國傭船スンガリーも破壞沈沒せり、我艦隊一つの死傷者なく、艦躰も損害無し軍氣大に振ふ

コレーツの爆發ワリヤーグ、スンガリー沈沒

二月十一日午後二時大本營よ達したる東鄉聯合艦隊司令長官の報告に曰く、聯合艦隊は、去六日佐世保を出發したる後總て豫定の如く行動し、八日正午我が驅逐隊は旅順にある敵を攻擊せり、當時敵艦隊の大部隊は旅順港外にありて、我が驅逐隊の水雷に掛りしもの少くとも「ボルターワ」形一隻、巡洋艦「アスコリド」外二隻ありしものと認む、我が艦隊は九日午前十時旅順口沖に進し、正午より約四十分間港外に殘留せる敵艦隊を攻擊せり、此攻擊の結果は未だ明瞭ならざるも、敵に少からざる損

旅順口第一海戰

害を與へ、大に彼れが士氣を阻喪せしめたるものと認む、敵は漸次港内に逃走するの〻如し、午後一時戰鬪を止め引上げたり

此攻擊に於ける我が艦隊の損害は輕少にして、寸毫も戰鬪力を減せず、死傷は五十八名内、戰死四名、負傷五十四名なり

仁川方面に向いたる分遣隊の戰況は、既に瓜生司令官より直接電報せるが如し、我が驅逐艦は敵の砲火を冒して攻擊を果し、其大部は既に本隊に合せり、艦隊に御乘艦の各殿下は皆御無事なり

我將卒一般の戰鬪に從事せる狀況は、頗る沈着にして、恰も平常の演習に異ならず、戰鬪後に於ける士氣は益々旺盛にして、若かも擧動は愈沈着なり、今朝來風波ありて艦船間の交通不通なる爲め、未だ各艦より詳報に接せず、不取敢右概況のみ報告す。

我陸軍上陸

我陸軍初めて仁川に上陸す。

宣戰詔勅

天佑を保有し萬世一系の皇祚を踐める大日本國皇帝は忠實勇武なる汝有衆に示す。

朕茲に露國に對して戰を宣す朕か陸海軍は宜く全力を極めて露國と交戰のことに從ふへく朕か百僚有司は宜く各々其の職務に率ひ其の權能に應して國家の目的を達するに努力すへし凡そ國際條規の範圍に於て一切の手段を盡し遺算なからむことを期せよ

惟ふに文明を平和に求め列國と友誼を篤くして以て東洋の治安を永遠に維持し各國の權利利益を損傷せすして永く帝國の安全を將來に保障すへき事態を確立するは朕夙に以て國交の要義となし且暮敢て違いさらむことを期す朕か有司も亦能く朕か意を體して事に從ひ列國との關係年を逐ふて益々親厚に赴くを見る今不幸にして露國と釁端を開くに至る豈朕か志あらむや

帝國の重を韓國の保全に置くや一日の故に非す是れ兩國累世の關係に因るのみならず韓國の存亡は實ま帝國安危の繫る所たれはなり然るに露國は其の清國との盟約及ひ列國に對する累次の宣言に拘はらす依然滿洲に占據し益々其地歩を鞏固にして終に之を併呑せむとす若し滿洲にして露國の領有に歸せむ乎韓國の保全い支持する由なく極東の平和亦素より望むへからす故に朕は此機に際し切に妥協に由りて時局を解決し以て平和を恒久に維持せむことを期し有司をして露國に提議し半歳の久しきよ亘りて屢次折衝を重ねしめたるも露國は一も交讓の精神を以て之を迎へす曠日彌久徒に時局の解決を遷延せしめ陽に平和を唱道し陰に海陸の軍備を增大し以て我を屈從せしめむとす凡そ露國か始より平和を好愛するの誠意なるもの毫も認むるに由なし露國は既に帝國の提議を容れす韓國の安全は方に危急に瀕し帝國の國利は將に侵迫せられむとす事既に茲に至る帝國か平和の交渉に依り求めむとしたる將來の保障は今日之を旗鼓の

間に求むるの外なし

朕は汝有衆の忠實勇武なるに倚賴し速に平和を永遠に克復し以て帝國の光榮を保全せむることを期す

御名　御璽

明治三十七年二月十日

内閣總理大臣兼内務大臣　伯爵　桂　太郎
海軍大臣　男爵　山本權兵衛
農商務大臣　男爵　清浦奎吾
大藏大臣　男爵　曾禰荒助
外務大臣　男爵　小村壽太郎
陸軍大臣　寺内正毅
司法大臣　波多野敬直
遞信大臣　大浦兼武

文部大臣　久保田讓

露國皇帝宣戰詔勅を發す。露國公使館へ勅使差遣。

我混成旅團京城に入るの報あり。

捕獲審檢所設立。田中不二麿を所長となす。

戰時禁制品を定む。

栗野公使露京を引上ぐ。

防禦海面區域を定む。

陸軍省恤兵部開始す。

地方長官諮問會を開く。

爪生第二艦隊司令官に勅語を賜ふ。

二月十二日午前十二時三十分函館要塞發同二時東京着參謀總長宛報告に曰く、只今松前郡福島村長より函館市長宛の報告に依れば、全勝丸、奈

二月十一日

露艦北海を襲ふ

奈古浦丸擊沈せらる

二月十二日

古浦丸、酒田より小樽へ航行中、午後一時(十一日)青森縣畫の日沖にて露國軍艦四隻に取卷かれ、砲撃を受け、奈古浦丸沈沒、全勝丸は午後八時三十五分福山に入港せり。露國軍艦は今尚沖合に在り。

露公使ローゼン男東京を引上ぐ。

英米伊西の四ヶ國局外中立を宣言す。

紀元節、宮中御賜宴。

露國七億法の外債募集。

山本海相東郷司令長官に祝電を送る。

悉伯利動員令の報あり。

陸軍中將黑瀨義門氏臺灣守備司令官に補す。

大本營を宮中に置く。

全國師團長會議。

駐韓露公使引揚ぐ。

二月十三日

アスコルド沈沒

清佛兩國局外中立を宣言す。

勅語を東郷聯合艦隊司令長官に賜ふ。

皇后陛下令旨を東郷司令長官に賜ふ。

勅語を一般軍人に賜ふ。

日露交渉斷絶に關する往復公文書發表。

帝國國債券一億圓發行を公布す。

大本營會議。

損傷露艦アスコルド内港にて全く沈沒す。

獨逸局外中立を宣告す。

臨時閣議。

二月十四日

旅順口第二攻擊

海軍省公報、二月十六日午後十時十分東京着電東郷司令長官の報告に曰く、二月十三日我驅逐艦の一隊大風雪を冒して旅順に向ふ、途上各艦見失ひて相分離せしも、司令艇速鳥及朝霧のみ旅順口外に達し、朝霧は十

朝霧速鳥の襲撃

四日午前三時港口を偵察し、盛んに陸岸の砲臺及哨艇の砲火を被りしに拘はらず、黑煙を揚げ居る露國の一軍艦に對し、水雷を發射し、且つ敵の哨艇を砲擊して無事歸り來れり。

速鳥は同日午前五時旅順口外に達し、港口に近接し、敵の二艦を暗中に發見すると同時に、其砲火を受けたるも、直ちに其露國の一軍艦に對し水雷を發射し、其爆發を確認して無事歸り來れり。

速鳥、朝霧の勇敢なる襲擊の効果は、暗夜のため之を知るに由なしと雖も、少くも敵をして益々戰慄せしむる大効ありたるは疑なしと認む。

本驅逐隊の司令は、海軍中佐長井群吉氏、速鳥艦長は、海軍少佐竹內次郎氏、朝霧艦長は、海軍少佐石川壽次郎氏なり。

各要塞地帶に戒嚴令を施行す。

遲、墨兩國局外中立を宣言す。

日曜出御。

二月十五日　臨時閣議。

國民的後援協議會を開く。

二月十六日　臨時閣議。

近衛師團長以下參內賜饌。

日進、春日兩軍艦無事橫須賀に入港す。

閣議。

二月十七日　比律賓局外中立を宣言す。

墺、匈兩國局外中立を宣言す。

內帑大金銀御下渡。

臨時閣議。

二月十八日　樞密院會議。

露國太平洋艦隊司令長官スタルク中將免せられ、マカロフ中將之に代る。

蜀國局外中立を宣言す。

井上伯に優詔を賜ふ。

臨時閣議。

二月十九日

日進春日兩艦回航員英伊士官東京市民歡迎會を日比谷公園に於て擧行す

瑞西亞爾然丁兩國局外中立を宣言す。

宮中の御正殿に於て近衛歩兵第一聯隊、同二聯隊、及歩兵第十六聯隊、第十七聯隊、第廿三聯隊、第廿四聯隊、第卅一聯隊、第四十六聯隊の後備諸隊に軍旗親授式の御親授あり。

清國の中立に關する公文を發表す。

俘虜取扱規則制定。

露帝日本を罵詈したる宣言をあす。

千代田艦長仁川戰況を上奏す。

臨時閣議。

二月廿日

桂總理の兼内務を解き芳川顯正子を以て内務大臣に任す。」

長井驅逐隊司令官に勅語を賜ふ。

露國藏相プレスケ氏辭職シココウゾウ氏藏相となる。

二月廿一日

日曜出御。

露國陸相クロパトキン在滿州軍總指揮官に任ぜらる。

二月廿二日

臨時閣議。俘虜情報局を設置す。

露國政府回答を送る。

日進春日回航員謁見及叙勲。

二月廿三日

日韓兩國代表者は二月二十三日左の議定書に調印せり

日韓議定書成る

議定書

大日本帝國皇帝陛下の特命全權公使林權助及大韓帝國皇帝陛下の外部大臣署理陸軍參謀將李址鎔は各相當の委任を受け左の條款を協定す

第一條　日韓兩帝國間に恒久不易の親交を保持し東洋の平和を確立する爲め大韓帝國政府は大日本帝國政府を確信し施政の改善に關し其忠告

を容るゝこと

第二條　大日本帝國政府は大韓帝國の皇室を確實なる親誼を以て安全康寧ならしむること

第三條　大日本帝國政府は大韓帝國の獨立及領土保全を確實に保障すること

第四條　第三國の侵害よより若は內亂の爲め大韓帝國の皇室の安寧或は領土の保全に危險ある場合は大日本帝國政府は速に臨機必要の措置を取る可し而て大韓帝國政府の行動を容易ならしむるため十分便宜を與ふること

大日本帝國政府は前項の目的を達するため軍略上必要の地點を臨機收用すること

第五條　兩國政府は相互の承認を經すして後來本協約の主意に違反すへき協約を第三國との間に訂立することを得さること

第六條　本協約に關聯する未悉の細條は大日本帝國代表者と大韓帝國外部大臣との間に臨時協定すること。

明治三十七年二月二十三日

特命全權公使　林　權　助　印

光武八年二月二十三日

外部大臣臨時署理陸軍參將　李　址　鎔　印

二月廿四日

第三回旅順攻撃

樞密院會議。

金子堅太郎男渡米。日本銀行總裁高橋是清氏渡英。

上村第二艦隊司令長官報告に曰く、我艦隊は總て豫定の通り行動し、二月二十三日夕旅順方面に近づき旅順港口閉塞の任務を有する特別運送船隊並に其乘員收容の任務を有する水雷艇隊を放つ、翌二十四日午前十時豫定集合點にて各驅逐隊水雷艇隊に會す、港口閉塞の狀況は報國丸は港

第一次旅順港口閉塞

口左側燈臺下に、武州丸は其外方に至り、各自から破壞沈沒、天津丸、武陽丸は老鐵山の東に至り自から破壞沈沒、仁川丸も亦同樣自ら沈沒す、以上五隻の乘員は總て收容し得て無事なり、我驅逐隊水雷艇隊も無事にして、港外にバヤーン、ノウヰック及敵の驅逐艦四五隻あるの報告を得たるを以て、同夜我驅逐艦隊を分つて、旅順口大連灣及鳩灣の偵察襲擊を命せらる。

遠距離砲擊

艦隊は迂路を航し、二十五日午前七時豫定集合點にて、各驅逐隊水雷艇隊に會合せしも、未だ其戰況を詳かにするを得ざりし、其れより本隊は旅順口に向ひしに、港外左方に當りバヤーン、アスコッド、ノウヰックの三隻徘徊し居れるも、遠く出でず、砲臺下を陸岸近く東西するを見午前十一時四十五分より敵艦及陸上砲臺に向て遠距離砲擊を始む、敵艦及陸上砲臺應戰せしも、正午過五分ノウヰック先づ港内に逃れ、アスコッド、バヤーンも續て港内に逃走せり、此分にては港口閉塞は其効果少なかりしが如く、甚だ遺憾に堪へず、是に於て各艦巨砲を以て、港内に向つて砲擊を行ひ、盛んに火炎の揚がるを見る、砲擊十五分の後之れを止め、引上げたり、此砲戰にて多少敵に損害を與へ、港内を威嚇し、得たりと信ず。

港内砲擊

此間我巡洋艦隊は、老鐵山附近よて、西方より來れる敵の驅逐艦二隻を認め、其一を逸せしも、他の一隻は之れを鳩灣に追窮し、終に之れを擊破せり。

ウヌシーテリヌイの沈沒

我艦隊總て一の損害死傷なし、東鄉聯合艦隊司令長官は猶ほ前進地にあり、以上は同長官より報告あるべきも本官より不取敢報告す。

閉塞隊の狀況

三月三日午後七時卅分着電東鄉司令長官報告に曰く、旅順口閉塞の結果に就き、曩に其概要を報告したる處、其後閉塞隊指揮官有馬良橘よりの報告に依れば、武州丸は敵彈の爲め舵機を破壞せられ、饅頭山下よ掴岸し、廣瀨武夫の指揮せる報國丸は、殆んと港口に達したるとき、其側に

座礁せるレトウサンより猛烈なる射擊を蒙むり、同じく舵機を破壞せられ、且船首に火災を起し、遂に燈臺下に擱岸沈沒せり、又齋藤七五郎の指揮せる仁川丸も、港口に入らんとするとき、燈臺より南東約二鏈半の位置にて、沈船と思はるゝ者に觸抵し進行する能はずして其位置に爆發沈沒したるものあり、右報國丸仁川丸の二隻は、完全に港口を閉塞せさるも、目的の一部は達し得たるものあり、仁川丸の閉塞隊員中、二等機關兵楳原健三は、沈置後端艇を卸さんとする際、敵彈の爲め戰死せり其他報國丸の下士卒三名輕傷したる外、閉塞隊員は皆無事に我水雷艇隊に收容されたり、勇敢なる閉塞隊等が、天明に至る迄長時間敵の砲火を蒙りたるよ拘らず、斯の如く些少の死傷を以て生還したるは、眞に奇異の現象にして、一に。

大元帥陛下御威德の擁護に因るものと云ふの外なし、右前報告に洩れたるを以て更に報告す。

二月廿五日 ウエレニアス提督の卒ゐるバルチック艦隊は引返しの命を受く。

二月廿六日 韓國外務大臣は義州開放の聲明を爲す。

二月廿七日 閣議。

露國西比利亞第四軍團を編制しサルバエフ將軍を軍團長に任ず。

二月廿八日 臨時閣議。

臨時樞密院會議

旅順閉塞隊に勅語を賜ふ。

バイカル湖氷上鐵道陷落す。

平壤門外に於る日露斥候兵衝突す。

日曜出御。

第三月

三月一日 衆議院議員臨時總選擧を執行す。

マカロフ旅順着

三月二日　新任露國太平洋艦隊司令長官マカロフ中將旅順に着す。

樞密院議長官邸會合。

大同江氷解。

臨時帝國議會召集の詔勅公布。

臨時閣議。

戰死者贈叙。

日本政府露國政府宣言の忘を弁駁す。

捕獲審檢令中改正。

三月三日　佛國東遣艦隊出發す。

臨時閣議。

三月四日　陸海軍感狀授與規定を公表す。

帝國軍人援護會組織さる。

三月五日　臨時閣議。

三月六日　第一回浦鹽砲擊

日曙出御。仁川沖海戰の分捕品を献納す。

鎮南浦航路開通す。

五日午前二時三十分大本營着電上村第二艦隊司令長官の報告に曰く、

豫定の如く六日朝結氷せる海を航し、浦塩斯德東口に達せり、敵艦軍港外に見ゆず、バサルギン岬半島及ボスフォール海峽砲臺の射界を避けたる位置より、北東陸岸砲臺下に接近し、午後一時五十分より、約四十分間、間接射擊を以て港内に向ひ威嚇砲擊せし後引上げたり、此砲擊は相應の効果ありしと信ず、陸上砲臺には陸兵を見しも、更に應戰せず、午後五時頃東口方向に當り黑煙の揚るを見る、或は敵艦の出で來りしが如くなりしも煙は次第に消滅し判明あらず、七日朝亞米利加灣スッレローク灣を偵察せしも異狀なし、正午再び浦鹽斯德東口に迫りたるも、敵艦見へず、砲臺發砲せず其れより轉してボシエット灣を偵察せしも敵なし

右報告す、

三月七日　伊藤樞密院議長韓帝御慰問のため特派大使仰付らる。

京釜鐵道工事着手。

韓國議政府官制を改革す。

三月八日　閣議。

韓國宮廷の密使仁川にて取押へらる。

政府列國に告知して二月廿二日露國回答の忘を弁ず。

三月十日　臨時閣議。

京義鐵道約款調印濟。

三月十二日午後八時十分東京着電東郷聯合艦隊司令長官報告ゟ曰く。

聯合艦隊は豫定の如く行動して、更に昨十日旅順口の敵を攻撃せり。

驅逐隊の二隊は同日午前零時旅順口港外に達し、港外を捜索して敵なきを認め、天明迄港外ゟ留まりて、驅逐隊は各所に特種の機械水雷を沈置せしが、敵の要塞は之に對し時々砲撃したるも、我驅逐隊は無事其目的を達するを得たり、然に午前四時卅分頃甲驅逐隊老鐵山の南方に約六隻より成る敵の驅逐隊に會し、近距離に於て約二十分間激戰し、朝潮霞曉の三艦は敵の諸艦と殆んど舷々相摩せんとするが如く接戰し、敵の三四艦に猛烈なる砲火を加へたるを以て敵は或は漏罐を破損し、或は火災を起し、或は悲鳴を揚げ多大の損害を負ふて敗走せり、我三艦も亦敵彈の爲め多少の損害を被り、死傷十五名、内戰死下士卒七名、負傷霞の大機關士南澤安雄の外下士卒七名ありたり、就中曉は漏罐の補助漏管を破壞せられ、一時漏氣したるが故に、機關兵四名熱傷に依り戰死せり、但各艦共に戰闘航海に支障あらず。

又乙驅逐隊ゟ午前七時港外を去らんとする際、偶々洋中より旅順口に入らんとする敵の驅逐艦二隻を發見し、直ゟ其前路を遮りて之を攻撃し、戰闘約一時間多大の損害を加へたる後其一隻を逃したるも他一隻ステレグイシチを捕獲し、敵の要塞砲火の下ゟ於て遂に之を捕獲し曳航し

機械水雷を沈置す

第四回旅順攻撃

艦々相摩す

南澤安雄

ズテレグーシチを捕獲す

ステレガシチー全く沈没す

つゝありしも漏水甚しく且つ波浪の高くして曳綱切斷せしを以て捕虜兵四名を收容して捕獲敵艦を放棄せり、其後午前十時十五分に至り右ステレガシチーは全く沈没す、此戰鬪に於て乙驅逐隊の諸艦にも損傷ありしも多大ならず、漣、曙の二艦に戰死卒二名、負傷曙の少尉島祐吉、外下士三名あり之より先き敵艦「ノーウヰタ」及「バヤーン」は港外に出て來りて、我が驅逐隊に向ひ進航し來りしが、我巡洋艦隊の港外に接近するを見て港内に退却せり。

間接射撃

我主力艦隊及巡洋艦隊は、同日午前八時旅順口沖に達し、巡洋艦隊は直に港口正面に進み、我驅逐隊を掩護し、次て主力艦隊も又老鐵山附近に至り、午前十時より午後一時四十分迄連續港口に對し間接射撃を行へり巡洋艦の一隊が、港口正面より看的報告する件に依れば、其彈着は概して良好にして其効果少からざりしもの〻如し、我砲撃中敵の要塞も時々應戰したるも、我艦隊の諸艦は一の損傷なかりし、又巡洋艦の他の一隊は大連灣外に至り、港口三山島に於ける敵の建設物を砲撃破壞せり、又高砂、千早は特に旅順口半島の西岸を索敵せしも敵を見ず。

大連灣攻撃

ウヌシーテリヌイの沈没

前回の攻撃に於て我巡洋艦隊に撃破せられ鳩灣に擱岸したる敵の驅逐艦い、ウヌシーテリヌイにして今や檣及煙突の上部を水面上に現はして沈没し居れり、我各隊は午後二時戰鬪を止め一旦豫定地點に集合したる後引上げたり。(本報告は三月十一日認めたるものなり)

三月十二日

國庫債券募集締切應募額四億五千二百十一万五千百圓即ち募集額の四倍半に達す。

第九回元老會議(財政計畫に付)

露國陸軍總司令官クロパトキン將軍露都出發。

第二回大本營會議。

三月十三日

金子堅太郎男着米。

日曜出御。

伊藤特派大使出發。

東郷司令長官に勅語を賜ふ。

戰地叙勳の嚆矢。

戰地叙勳の嚆矢。(大機關士南澤安雄を機關少監に任じ功四級金鵄勳章勳五等双光旭日章を賜ふ)

三月十四日　末松謙澄男着英。

東宮殿下東郷司令長官に令旨を賜ふ。

三月十五日　韓國顧問招聘

臨時閣議。(財政計畫に付)

加藤增雄は宮内府顧問に佐野津鎮は軍事顧問に何れも韓國に招聘さる。

三月十六日　軍旗親授

桂首相戰時財政に關し貴議院議員並に政友會憲政本黨兩議員を官邸に招待す。

軍旗親授式(後備歩兵第三聯隊及第十五聯隊)

桂首相中立議員を其官邸に招待す。

政友、憲本、帝國三政黨大會。

三月十七日　韓帝我駐韓公使館付伊地知少將に勳章を賜ふ。

伊藤特派大使京城着。

上田中將第五師團長に補せらる。

中將山口素臣男陸軍大將に任じ軍事參謀官に補せらる。

中將寺内正毅氏教育總監に補せらる。

第〇師團陸軍將官四名拜謁及上長官以下二百五十八名拜謁。

三月十八日　陸軍將校拜謁

井上伯邸會合。(財政計畫に付)

臨時帝國議會召集。

伊藤特派大使韓帝内謁見。

三月十九日　松田正久氏衆議院議長に箕浦勝人氏副議長に選擧せらる。

三月二十日　英佛新條約調印。

臨時閣議。

日曜出御。

三月廿一日

帝國議會開院式。

伊藤特派大使韓帝内謁見。

桂首相對政友會憲政本黨領袖會見。

韓廷龍巖浦開放を確定す。

桂首相邸に於て財政計画に就て會合す。

憲政本黨大隈伯邸に於て懇話會を開く。

三月廿四日午後發電六時五十分大本營着電東郷聯合艦隊司令長官報告に曰く、聯合艦隊は豫定の如く行動し、両驅逐隊は二十一日夜より二十二日未明迄、旅順口外に在りて、與へたる任務を遂行せり。

此間多少敵の砲火を蒙りしも別に損傷あし、又本隊及巡洋艦隊は、廿二日午前八時旅順口の沖に達し、其一部を鳩灣の方向に遣はし、富士八島をして、港内に對し間接射撃を行はしめたり。

此砲撃中、敵艦は漸次に港外に出で來り、午後二時過ぎ間接射撃を止むるの頃、其數戰艦五隻、巡洋艦四隻、驅逐艦十隻となれり、敵は終始砲臺下に運動し、我を誘致せんとするものと認めたり、又敵艦よりも間接射撃をなしたるものゝ如く、特に富士の附近に着彈多かりしが、一も損傷なし。

第五回旅順攻撃

三月廿二日

我各部隊ハ午後三時迄に港外を去り引上げたり。

内閣會議。

戰時財政案を衆議院へ提出す。

政友會代議士總會。

憲政本黨代議士會。

政友會憲政本黨交渉總會。

政友會憲政本黨代表者桂首相と會見す。

伊藤大使韓國外部の饗宴に臨み演説す。

政府衆議院に於て日露外交往復文書を發表す。

三月廿三日

三月廿三日　英國政府彈劾案否決さる（[illegible]）

三月廿四日　軍人恩給法改正案を衆議院に提出す。
　　韓廷龍巖浦開放を聲明す。
　　林駐韓公使平安道、黄海道江原、沿海岸の漁業權を韓廷に要求す。

三月廿五日　伊藤特派大使韓帝御暇乞内謁見。
　　衆議院帝國海軍に對する感謝決議案を可決す。

三月廿六日　衆議院非常特別税法案及附帶法案軍事豫算五億七千六百万圓を可決す。

三月廿七日　伊藤大使京城を出發し歸途に就く。

第六回旅順攻擊　再度の閉塞。
　　東郷聯合艦隊司令長官報告に曰く、聯合艦隊は去二十六日再び旅順口に向ひ、同二十七日午前三時三十分敵港閉塞を決行せり、四隻の閉塞隊は驅逐隊及水雷艇隊掩護の下に、旅順口外に達し、敵の探海燈の照射を冒して港口に直進し、約二海里に達する頃、敵の發見するとゝろとなり。

第二次旅順口閉塞　兩岸の要塞及哨艇より猛烈なる砲火を受けしも、之に屈せず、四隻相次て港口水道に闖入し、第一の千代丸は黄金山の西側に於て、海岸より約半鏈の處に投錨爆沈し、第二の福井丸は千代丸の左側を過て、少しく前方に進み投錨せんとするとき、敵驅逐艦よりの魚形水雷一發命中し、次て其位地に爆發沈沒し、第三の彌彦丸も福井丸の左側に出て投錨爆沒せり、第四の米山丸は稍々後れて港口に達し、敵の一驅逐艦の艦尾を衝突しながら、既に沈沒せる千代丸と福井丸との間を通過し、水道の中央に投錨せしとき、敵の魚形水雷一發を受け爆烈し、惰力の爲め左岸に近く船首を左にして横に沈沒せり、敵の猛烈なる砲火の下に於て斯の如く閉塞船が勇敢沈着、其任務を遂行したるは、事業として間然する所なく、誠に賞讃するに餘りあり、唯遺憾なるは彌彦丸と米山丸との間に、尚ほ空隙を存じ、完全に通路閉塞するを得ざりしこと、此壯烈なる閉塞の再舉試べ前回之に從事したる勇士の勳績を容れ、爵位及機關士は

主として前回の者をして之に任せしめ、下士以下のみは新志願者を以て交代せしめたり、閉塞隊員中戰死中佐廣瀬武夫、兵曹長杉野孫七、外下士卒二名、重傷中尉島田初藏、輕傷大尉正木義太、大機關士栗田富太郎外下士卒六名にして、其他は悉く無事、我が水雷艇隊驅逐隊に收容されたり、戰死者中福井丸の廣瀬中佐及杉野兵曹長の最後は頗る壯烈にして、同船の投錨せんとするや、杉野兵曹長は爆發藥に點火する爲め船底に下りし時、敵の魚形水雷命中したるを以遂に戰死せるもの〻如く、廣瀬中佐は乘員を端舟に乘移らしめ、杉野兵曹長の見當らざる爲め自ら三たび船内を捜索したるも、船體漸次に沈沒海水上甲板に達せるを以て、止むを得ず端舟に下り、本船を離れ敵彈の下を退却せる際、一巨彈中佐の頭部を擊ち、中佐の體は一片の肉塊を艇内に殘して海中に墜落したるものなり、中佐は平時に於ても常に軍人の龜鑑たるのみならず、其最後に於ても萬世不滅の好鑑を殘せるものと謂つべし。

閉塞隊員の拖護收容に就ては、直接其任に當りし水雷艇隊最も其力を盡し、天明過ぐる迄敵の砲火に曝露して其任務を遂行せり、就中蒼鷹、燕の二艇は、閉塞船隊を護衛して港口より約一海里に達し、敵の驅逐艦一隻と會戰し、多大の損害を加へ、敵は滊罐を破烈されたるもの〻如く、盛に蒸氣を吹かしつ〻退却せり、閉塞隊の端舟を港外に退却するとき目擊する所によれば、敵艦と認むべきもの黄金山下に於て、全く進退自由を失ひたるもの〻如くなりしと云ふ。

我水雷艇隊、驅逐隊は天明過ぐる迄熾なる敵の砲火を蒙りしに拘らず、寸毫も損傷なし、閉塞隊員の收容は千代丸及彌彦丸の乘員は燕に、米山丸乘員は端舟三隻に分乘して、鵠、雁に收容され、福井丸の乘員は霞に收容されたり。

クロパトキン大將哈爾賓に着す。

露國極東太守營口に戒嚴令を施行す。

三月廿八日

第一軍定州占領

廿八日午前十一時五十分定州南門外に於て騎兵隊の將校斥候、敵に遭遇して該隊及歩兵の一部は、之を收容し、終局此敵を擊退して定州を占領し、陛下の萬歳を唱に、士氣極めて旺盛なり、將校斥候ハ定州南門附近に在る敵の射擊を受け北方に避け、騎兵の主力之を收容する爲め全力を盡して射擊す、午後一時十五分我歩兵は急行して、定州東北約二千メートルの地に來りて射擊するや、敵は義州街道郭山街道を退却す、我歩兵騎兵の一部は之を進擊す、敵の兵力は約六百也、此戰に於て受けたる我損傷は、戰死者中尉加納忠男、特務曹長清末廣吉、下士以下三名、負傷兵大尉黒川敬藏（兩臂貫通銃創）中尉幸村銀六（右眼貫通銃創）下士以下十名、歩兵隊には一の死傷あく、馬匹死、傷七なり。

戰場遺棄せし敵の死者二、下士一なるも土人の言によれば、城内に在りし、死者のみにても七八名あり、敵は巧に馬背及擔架によりて、死傷者を運搬し去れり、現に將校らしきもの二名の倒れたるを擔架によりて危

三月廿九日

險を冒して、運び去るを見たり、此他血染の繃帶處々に散在しあるを見れば、敵は少くとも我と同等の損害を受けしならん。

貴族院非常特別稅法案及附帶法案可決。

露艦マンジュール號上海に於て武裝を解く。

露國牛莊に戒嚴令を施す。

貴族院臨時軍事豫算を可決す。

衆議院國民援護決議案を可決。

サハロフ參謀總長陸軍大臣に選任せられ、陸軍中將フーロー氏代つて參謀總長となる。

貴族院第二回閉塞隊戰死者哀悼の決議をなす。

貴族院貯蓄債券法を修正可決す。

帝國議會閉院式。

帝國總領事は秋津州艦長と共にマンジュール號より取去たる武器を臨檢

三月卅日

す。

霞ヶ關離宮に於て兩院議員及各大臣政府委員兩院高等官に立食御下賜。

臨時事件費支辨に關する法律、及陸海軍に屬する臨時事件費を特別會計となすの法律を公布す。

臨時軍事費、卅七年度歳出入總豫算追加、卅七年專賣局特別會計追加豫算公布。

三月卅一日

政友會議員總會。

四月一日

開國五十年紀念會。

露艦マンジュール問題結了。

第四月

伊藤大使(博文)歸京復奏。

臨時閣議。

非常特別稅法外十六法律、九勅令を公布す。

四月二日

清國食糧品一切及糠、豆粕等を戰時禁制品となす。

林駐韓公使(權助)韓廷に忠言す。

四月三日

英兵西藏人と衝突す。

四月四日

小田切上海總領事戰時禁制品に關して清國に抗議す。

義州占領

我兵義州に入る。

下士卒家族救助令を發布す。

四月五日

我兵全く義州を占領す。

臨時閣議。

四月六日

英露新協商の交涉着手せらる。

第三回大本營會議。

四月八日

海軍大尉齋藤七五郎氏旅順閉塞詳況を奏上す。

露艦マンヂュール交涉顚末を發表す。

林駐韓公使韓廷へ照會す。

四月八日

憲政本黨第二十議會報告書を發表す。

四月九日

臨時閣議。

セバストポールに於る露國豫備海兵動員。

英佛協商調印成る。

四月十日

鴨綠江軍の鴨綠江口偵察

大本營着細谷司令官報告に曰く、本職の命に依り海門艦長は鴨綠江口偵察の爲め海軍中尉山口毅一に下士卒五名を附し、朝鮮漁舟に乘せしめ目的地に差遣せしに一行は十一日無事歸艦せり。

十日午後二時中尉の一行は、敵兵七名右岸より支那漁舟に乘じ、斗流浦に來るを發見し、左岸に到着しある我騎兵斥候と、水陸共力して之を射擊す、少時にして敵兵十數名大漁舟にて來り加はり、應戰しつゝ退却す中尉は之を右岸まで追擊す、敵は上陸逃走せり、交戰一時廿分間、敵は戰死一、負傷二、我は死傷なし。

敵の乘捨てし漁舟を檢ずるに、實彈十、打殼約四百殘留せりと云ふ、此敵は騎兵にして、監視の任務にありしものと認めらる。

陸軍の鴨綠江口戰鬪

四月十三日午前十一時十分大本營着陸軍側の公報に曰く、龍巖浦に在りし上原騎兵中尉の報に據れば十日午後三時露兵九名變裝して龍巖浦の西南千五百米突の海岸より上陸を企てたるを以て、山口海軍中尉と協力し、○よりは騎兵二〇分隊にて捕獲を努め、海軍は海より船にて敵の退路を斷たんとせしに、彼れは早くも退却を始めし故、之を射擊せり、此時前面の中洲に敵兵二三十名上陸し居りて、之を收容せり、敵は二三の死傷ありしもの、如く我兵無事。

此他敵ハ變裝して、義州龍巖浦の間に於て切りに渡河を企てしも、皆之を擊退せり。

十二日朝敵の歩兵約三四十名、鴨綠江第一江を義州の西にて渡河せんとせしを以て我歩兵一小隊ハ之を射擊せしに、敵ハ士官一、兵卒二十一の死體を殘して退却せり、此敵は射擊歩兵第十二聯隊なりし我兵死傷なし。

日曜出御。

四月十一日

士勃協約調印成る。

英國艦隊三十餘隻香港々外にて大演習をなす。

四月十二日

墺伊外相九日會合したる報あり。

クロパトキン將軍營口に滞在す。

廣瀬中佐正四位を贈らる。

內閣會議。

海軍省長州美禰炭山を買上ぐ。

滞國豆の輸出禁止を解除す。

鴨綠江に於て日露兵小衝突を爲す。

四月十三日

第八回旅順攻擊

東鄉司令長官報告に曰く。聯合艦隊は去る十一日より、豫定の如く行動し、更に旅順口の敵に對して、第八次の攻擊を爲せり、第四驅逐隊、第五驅逐隊第十四水雷艇隊及蛟龍丸は、十三日午後半旅順口港外に至り、敵の探照を冒して港口に近づき、計畫の通り港外の各所に機械水雷の迅速なる沈置を遂行し得たり。

機械水雷沈置

驅逐艦レストラーシヌイ擊沈

又特別の任務を有せる第二驅逐隊は、十三日黎明港外鮮牛角の南東を辿遲せる時、東方より旅順口に入らんとする四本煙突を有する敵の驅逐艦一隻を發見し、直ちに其前路を遮りて之を攻擊し、約十分間戰鬪の後之を擊沈せり、又同時頃西方老鐵山の方向より來れる他の敵驅逐艦一隻を發見し轉じて之を攻擊せしが、距離遠くして遂に之を港口に逸せり、此戰に於ける第二驅逐隊の損傷は輕微にして、唯「電」の卒二名輕傷せるのみ、擊沈せる敵艦の溺者は、敵艦「バヤーン」の近づき來りしため之を救助するの暇なかりし。

第三戰隊は、午前八時港外に達して、第二驅逐隊を掩護し、且つ敵情を偵察せり、午前九時頃敵艦「バヤーン」我に向ひ突進し來り、遠距離より砲擊を開始せしを以て、徐々に應戰して之を擊退せり、幾もなく敵艦

旗艦ペトロパウロウスク沈没　マカロフ總督戰死

ポピヘダの損傷

「アーヴヰック」、「アスコリド」、「ヂアナ」、「ペトロパウロウスク」、「ポベーダ」、「ポルターツ」、等「バヤーン」と合し、攻勢を取りて反擊し來り、第三戰隊は之に應戰しつゝ、敵を南東方向約十五海里に誘致せり、此時沖合約三十海里に方りて、濃氣の内に隱れたる第一戰隊は、第三戰隊の無線電信に接し、直ちに急進して敵艦隊に逼りしか、敵は艦首を轉して港口に向ひ背進せしを以て、尙益々追躡して之を港前に壓迫せるとき、先頭に占位せる「ペトロパウロウスク」と見へたる敵艦一隻、前夜沈置したる我機械水雷に掛り、爆發轟沈せるを見る、時に午前十時三十二分なり、敵の殘艦は此慘憺たる光景に驚きて大に混亂し、尙ほ外に一敵艦の進退自由を失ひたるの疑わりしも、敵艦隊混雜の爲め其艦型を識別する能はざりし其後敵の殘艦は約一時間、頻りに艦側附近の水面を砲擊しつゝ漸次に港内に入り、正午過ぐる頃港外に敵影を見ざるに至れり、此戰鬪の初期砲戰に於て、第三戰隊は一の損傷なく、敵の損害も亦

四月十四日

春日日進の間接射擊

少許なるべく第一戰隊は遂に敵と砲戰距離に近かざりし。

當日午後一時艦隊は旅順口港外を去り、豫定地點に集合して洋中に假泊し、更に準備を整へて十四日午後四時より、再び旅順口に向ひ發動せり第二驅逐隊、第四驅逐隊、第五驅逐隊、第九水雷艇隊は、翌十五日午前三時前後相次で旅順口港外に達し、豫定計畫の如く再び其任務を遂行せり、午前七時第三戰隊も港外に現はれ、敵情を偵察せしが、港外に敵影なく、港内寂然たり、又第一戰隊は午前九時旅順口沖に至り、途上浮流せる敵の機械水雷三個を發見し、一々之を砲擊爆沈し、午前十時より春日、日進を老鐵山の西方に分派し、約二時間港内に對し、間接射擊を行はしむ、敵の要塞及港内の敵艦も、時々之に應戰せしが、兩艦共に損傷あらず、此両艦は此日を以て敵に對し、其初彈を發射せしが、其射擊の効果は相應に之れありしが如く、老鐵山西の新造砲臺も沈默せしめたり午後一時三十分艦隊は交戰を止め歸航せり。

ペトロパウロスクの死傷

此連續せる作戰に於て、聯合艦隊が一兵をも失はずして、多少の戰果を擧げ得たるものは一に大元帥陛下の御威德に依るものにして、麾下將卒は終始勇往敢爲其任務を遂行するに忠實なるも、其奏功成果に至ては人力の及はざる所多し、特よ多數の艦艇が晝夜を問はず敵機械水雷の浮流せる洋中を縱横に航行し、然かも今日に至るまで一の危害を受けたることなきが如きは、只天祐と確信するの外あらざるなり。

四月十五日午後〇時五十分或筋に達したる情報に曰く、十三日に沈沒したる敵の旗艦に於ける死傷は、艦隊參謀部に於て艦隊司令長官（マカロフ）參謀長以下上長官三、尉官六、同相當官四、陸軍參謀大佐一即死せり、軍艦乘組定員に於ては副長一、尉官七、同相當官三、僧一下士以下五百九十六即死、艦長及尉官一、重傷、キリル大公輕傷、其他將校五、下士以下三十二負傷せるが如し。

朝鮮王宮炎上。

マカロフの後任

四月十五日

アレキセーフ大將マカロフ中將の後任者たらんとせしに、黑海艦隊司令長官スクルイドロフ中將を後任と爲すに決す。

是日より三日間露都に於て大祈禱會を執行す。

四月十六日

報聘大使李趾鎔日本に向て出發す。

四月十七日

第四回大本營會議。

韓國皇室へ御親電あり。

臨時閣議。

ウキレニウス將軍引率の露國艦隊返航して波羅的海に入る。

旅順の敗報に接して露都震駭す。

露兵北韓の城津を占領す。

清國漢口に在る總督張之洞氏重病との報あり。

新任要塞司令長官陸軍中將スミルノフ十七日午後十二時旅順口に着。

東鄕司令長官へ勅語を賜ふ。

[illegible]出御。[illegible]

京釜鐵道永登浦成就開通。[illegible]十八日午後十二時[illegible]日[illegible]

四月十八日

日本公債騰貴。[illegible]

清國豆粕輸出の禁止を解く。

四月十九日

閣議。

清國穀輸出の禁止を解く。

四月廿　日

觀櫻會御見合せとなり其御料理を赤十字社病院施療患者、東京市養育院

福田會、東京育兒院等へ賜ふ。

四月廿一日

アレキシーフ總督は、太平洋艦隊司令長官スクリードロフ中將到着まで

何等の行動をも爲すべからざる旨命せらるると傳ふ。

日本公債大飛躍。

英國增稅案可決。

極東總督アレキシーフ大將辭表を呈出す。

北韓の露兵釜山下し、北青を經て元山方面に向ひつゝありとの報あり。

四月廿二日

煙草賣捌規則發布。

鴨綠江の小衝突。

閣議。

韓國大使李址鎔入京す。

マッギー夫人一行横濱着。

閑宮林藏正五位を贈らる。

倫敦市場に於ける日本公債引續き騰貴。

栗野公使香港に着す。

四月廿三日

マッギー夫人入京す。

紀淡海峽の防禦を解除す。

露國八億法の外債を巴里に募集す。

露國新太平洋艦隊司令長官スクリードロフ中將五月三日露都出發東向に決

上村艦隊の元山出港

す。

四月二十六日午後八時元山發電、上村第二艦隊司令官報告の要領左の如し。

二十三日元山津出港間もなく濃霧に會し、之を冒して航進せり、北上するに從ひ霧は益々濃厚となり、二十四日午後四時推測に依れば、東經百三十二度十分、北緯四十二度二十分附近に達したるも四面濃霧に覆はれ何等行動を爲す能はざるを以て、午後四時三十分正南に轉針し、二十五日午前六時、東經百三十二度二十分、北緯四十度五十分附近に到達せしも、霧は依然濃厚にして、再び引返すも到底浦盡斯德に接近行動し得るの見込なきを以て一時元山津に歸航するに決し、針路を更定し、今二十六日朝に至り、霧漸〳〵晴る此の間約三晝夜、全く濃霧に閉塞せられ、時に艦隊の一部を望見し得たることありしが、多くは後續艦すら見るを得ざりし狀態なりしも、幸に一艦艇をも見失ふことなく、艦隊全部幸ふして午後一時當港に歸着するを得たり。

四月廿五日 浦潮艦隊來襲 五洋丸轟沈

入港するや直に大本領事來艦す、其報告に依れば、二十五日正午頃敵の水雷艇二隻元山津に進入し、我商船五洋丸を擊沈し退却せり、此時港口に在り「ロシヤ」「グロモボイ」「リューリック」と認むる敵艦三隻あり、午後二時頃北東に向て退去せり又た廿五日午前六時頃金州丸は陸軍守備隊一個中隊を乘せ、第十一艇隊と共に利源縣方面に向ひ北行せりと云ふ、依て右船艇は或は敵艦隊に會せしやの疑あるを以て第二艦隊主力及驅逐隊を率ゐ直に出港敵艦隊を追尾せんと欲し出港準備整ひたるとき、第十一艇隊のみ歸港せり、同司令の報告に依れば二十五日午後二時利源縣着陸軍兵は直に上陸して偵察を終り、午後六時歸船す於是艇隊金州丸共に歸途に就く、然るに當時天候險惡の兆を呈したるを以て金州丸は單獨元山津に向ひ艇隊は同夜遮湖浦に假泊し、今二十六日午前六時同所發元山津に歸港せりと金州丸は只今に至るも歸港せず、是れ敵艦隊に會せし爲め

なるや、又濃霧の爲めなるや、不明なるに付、直に艇隊を捜索に出せり。

本職は明二十七日午前七時出發再び豫定の如く行動せんとす。

四月二十八日午後十一時二十分元山津發電、福井千早艦長報告の要領左の如し。

二十七日浦盡に向ひ艦隊航行中、東經百二十八度五十四分、北緯四十度五分の位置に於て、鼠色傳馬船の漂流しあるを發見せしに、船中に三十五年式海軍銃劍帶一、海軍靴一、士官用らしき靴一ありて之を採取せり血の跡らしきものを見ず、依て金州丸は敵艦を發見するや北方に避け海岸に乘上げ、艇を捨てたるものならんかとの想像を以て、本官は司令長官の命に依り、艦隊と分離して、夜の明るを待ち、城津の北東二十五海里なる「ブルアット」岬より南下しつゝ、沿岸殘すところなく、遮湖浦迄捜索したれども其影を認めず、遮湖浦以南は昨二十七日、水雷艇隊捜

索を爲したるなるを以て、本艦は其捜索を止め、唯金元山に歸着せしに、金州丸沈沒のこと並に新浦に在る遭難者收容の爲め救助船を派遣したること等を聞きたり、本艦は今夜更に出港して新浦に向はんとす。

四月二十九日午後七時十五分元山發電、武部第十一艇隊司令報告の要領左の如し。

十一艇隊は二十五日午前六時、陸兵を載せたる金州丸と共に元山津を發し、利源縣に向ひ午後二時同地に着して、陸兵の上陸を援助し、午後六時に至り、其陸兵を收容したる金州丸と共に抜錨歸途に上らんとしたるが、正午過より降下を始めたる晴雨計は益々急降し天候險惡の兆ありしを以て、艇隊は遮湖浦に留まり、翌朝出發新浦を經て元山に歸るべきことを金州丸に告げ、則ち假泊す、金州丸は單獨歸航せり。

艇隊は廿六日午前出港せしも濃霧に遭ひ同日午後三時辛ふじて元山津に入港し、我艦隊に合し、茲に始めて金州丸の未だ歸着せざるを知り、上

材司令長官の命に依り、直に金州丸捜索の爲め出發し、元山津より遮湖浦に至る沿岸一帶を捜索せる後、此夜遮湖浦に假泊、二十七日早朝出發捜索中泰盛丸に會合し、金州丸沈没の事實を聞き、尚ほ避難者あるべきを思ひ、廿八日午前八時迄、退潮浦附近に至る海面を捜索し、唯今元山津に歸着せり、金州丸に陸軍兵の搭乘したるは、敵兵約二百五十、吉林より北青に向て出發すとの情報に接し、一中隊を利源に送り、威嚇運動を行はんとの希望を有したる元山守備隊長の協議に應じたるものなり。

五月一日午後零時十五分元山發電、上村第二艦隊司令長官報告の要領左の如し。

本隊は二十七日午前七時元山津出發、港外にて第十一水雷艇隊より、金州丸に會せざるの報に接したるを以て、再び元山津以北の沿岸海面を捜索すべきを命ず、次て千早は新浦以北の沿岸海面を捜索の爲め先航せしめ、本艦隊は新浦沖合に向へ、遮湖浦沖にて傳馬船二漂流せるを認めて之を撈せしめ、其遺留品より推究せば、最早金州丸は敵に遭遇せしものなることは疑ふの餘地なきも、或は尚ほ以北の沿岸に遁走乘り上げ避難せしやの疑あるを以て、千早にはブルアット岬以南の沿岸を尚ほ捜索したるの後、元山津に歸港し、其結果を大本營に報告すべきを命じ、之を分派せり、其詳細は千早艦長報告の如くにして、最も遺憾よ堪へず。

艦隊は豫定の如く北進せしが二十八日午後四時頃より、漸次濃霧と爲り豫定行動を取る能はず終夜警戒航行の後、歸途に就くの已むを得ざるに至れり、途中浪速は敵の機械水雷の海面に浮流するを發見し、和泉をして之を撃沈せしめたり、今朝城津沖を南下する頃二隻の端舟漂流するを認め、之を捜せしに金州丸附屬端舟として、其内には救命帶及兵員の所持品二三を發見し端舟は之を採取せり。

二十九日午前十一時廿五分大本營着電に曰く、陸海共同の下に於て歩兵

金州丸沈没の狀況

三十七聯隊第九中隊金州丸に乘込み、成鏡道利原を偵察し、其の任務を終へて元山に歸港中、新浦沖に於て、敵艦の爲め擊沈せられたり其顚末は左の如し。

救助船大西丸二十八日午後十一時十分元山港に着、金州丸沈没の原因は

四月二十五日午後六時三十分、利原港を發し、同十一時十五分新浦附近の沖に於て敵の軍艦三隻、水雷艇二隻に遭遇し空砲を放ちたる故、監督將校海軍少佐溝口武五郎、飯田大主計、船長代木政吉外一名は敵艦に赴きたる儘歸らず、敵は一時間の猶豫を與へ人員を收容せしと云ふ、十二時頃には陸軍々人の外船中殆んど人無きが如し。

陸軍々人は上官の命に因り甲板上より出でずして沈黙し、午前一時三十分頃敵は水雷を發射し、且つ爆發藥を裝置して、爆發せるが如し、其の水雷は船室を貫く、茲に於て陸軍兵は甲板に上り敵に對し數列にて急射擊を爲し、敵は之に對し砲擊し、我が兵死する者多し、此時曹長は甲板の上にて割腹し、下士以下にも自殺せる者多し、午前二時頃敵は第二の水雷を發射し、爰に於て金州丸は機關部より二個に破壞せられ、水中に陷没し、甲板にありて射擊せし者は、一同水中に卷き込まれしも、再び水面に浮き上りし者ありて此者は恰も其上面に在りし端舟に乘り移り繩を切斷して漂流し、水は數々端舟を浸し、將に沈没せんとするを以て重量物を放棄し、僅に浮游するを得たり、其後力を極めて西に向つて漕ぎ二十六日午後五時卅分下士以下三十七名、馬養島に着、又他端舟にて卒八名はライヨウカッに二十七日正午過に着其後共に新浦に集まる人夫六商人三は水雷發射せられざる以前に於て遁れし者にして、多くの人夫傭人は敵艦ロシヤ號に收容せられたる者の如し、海軍兵端舟にて遁れし者あるも、其後不明なり、陸軍軍人は一兵も敵に捕虜と爲りたる者無し、生存者の外は悉く戰死せり、實に其最後は天晴にして一の批難すべき者無し殊に此の困難の際武器を携へて歸りし者五名あり、戰死せし陸兵は、大

財雄名三藏、櫻井久我治、中尉寺田重之助、横田信三、少尉橋垣正和、特務曹長鷲康勝、士卒七十三、通譯二、他は陸兵にあらずして不明、生存陸軍々人中輕傷十、稍や重傷一、商人人夫には傷者無し。

露國は八億法の募債白耳義ブラッセル府に於て締結せらる。

東京衛戍總督部條例出つ。

韓國報聘大使李址鎔參内、謁見。

陸軍省軍用通信所發新聞電報取扱手續を定む。

閣議。

アレキシーフ總督の辭表却下さる。

韓國大使李址容以下叙勳す。

露國獨逸より商船九隻を買入るとの報あり。

軍旗親授式。

第一軍近衛師團の一部九里島を占領し第二師團の一部鴨定島を占領す。

四月廿六日

四月廿七日

九里島鴨定島占領

四月廿八日

四月廿九日

鴨綠江渡河の準備攻擊

露國仲裁拒絶の回牒を爲す。

伊藤侯大磯に韓國大使李址容氏以下を招待す。

臨時閣議。

日本公債暴騰。

四月三十日午後九時五十分發五月一日午前一時四十分着電に曰く。

一、第十二師團は、今朝午前三時水口鎭に於げる架橋完成、續て渡河、午後六時豫定の陣地に着く。

二、野戰砲兵第二聯隊及び重砲兵聯隊は、未明までに豫定の陣地に着く午前十時四十分鴨定洞より中江臺に出したる我歩兵斥候に對し、九連城北方及び東方高地に在る、敵の砲兵之に向つて射擊したるを端緒とし、猛烈なる砲戰を開けり、午前十一時十五分九連城の敵砲兵は沈默、馬溝東方の高地に在る敵の砲兵八門は、九里島西方の架橋點に向ひ射擊を續行せり、我義州東方に敷設せる近衛砲兵之れに應じ、約十分の後馬溝東

方の敵砲兵又た沈默す、午後〇時半両方面の敵砲兵再び射擊を開始せしも、我射擊の爲め一時二十分頃再び沈默せり、我砲擊の結果敵に充分なる損害を與へたるものと認む、我軍損害は輕傷將校五、下士以下即死二負傷二十二。

三、鳴綠江本流の架橋は、午後八時完成し、諸隊は續々虎山北方の高地に前進す。

四、細谷艦隊の支隊は安東縣の下流に於て戰鬪に參與し、就中裝砲汽艇は、敵の砲兵及び步騎兵を、最も激烈なる戰鬪をなし、步騎兵約四百を擊退せり。

五、軍は豫定の如く、明一日未明砲擊を實行せんとす。

六、敵の砲兵は發射速度大にして、其曳火彈は確に七千五百メートル以上に達す。

細谷第三艦隊司令官報告に曰く、中川摩耶艦長より左の報告に接す、

海軍の鳴綠江威嚇砲擊

本分遣隊は、廿九日午前八時出港し、豫定の如く行動して、約一時間威嚇砲擊を爲す、敵之に應ぜず、午前十時五十五分錨地に歸泊す、裝砲艇隊は娘々城より北西約三里に在る三道娘頭に於て、敵の兵約百五十を發見し、之に向つて砲擊せしに、多くの死傷を殘し、山背に退却せり、我れ損傷なし。

長春吉林間の鐵道開通の報あり。

栗野公使佐世保に歸着。

第五月

佐久間左馬太子東京衛戍總督に補す。

日曜出御。

五月一日

第一軍九連城占領

五月一日午前十時廿分黑木大將發、同日午後一時三十五分大本營着電に曰く、軍は豫定の如く、天明を以て砲戰を開始し、午前七時五分楡樹溝西北高地にある敵の砲兵を沈默せしめ、同七時三十分より、各師團は攻

細谷艦隊の威嚇砲撃

裝砲滊艇

安東縣の火災

擊前進に移り、八時十五分より九時の間に於て、九連城より、馬溝、楡樹溝北方に亘る高地線を占領せり、委細後より。

細谷第三艦隊司令官報告五月二日午前大本營着電に曰く。

中川摩耶艦長より左の電報に接す。

分遣隊は一日午前九時半出港出來得る限り上流に遡行し、摩耶は安子山方面に宇治は六道溝方面の威嚇砲撃をおし、水雷艇は四道溝附近遡行威嚇砲撃の後歸行する際、安子山北東の山腹より不意に激烈なる砲隊の射撃を受く。應戰約三十分にして敵を沈默せしめ午前十一時半龍巖浦に歸着せり、我損傷なし裝砲滊艇は昨夜午後十時出港四道溝の上流に至り、約三十分威嚇砲撃を行ふ、敵之に應戰せり、翌午前一時歸港す。

本日午前九時卅分出港安東縣下流に到り、敵の歩兵砲兵と約卅五分激戰の後ち、敵を退却せしめ安東縣市街に火災起るを認め午後二時歸港せり我に損傷なし。

蛤蟆塘の激戰

分捕と捕虜

我軍の死傷七百

土人の言によれば、敵は安東縣市街に放火し、退却せしものゝ如し、軍は本日午前九連城附近を占領せり。

五月一日午後十一時廿分黑木大將報告、五月二日午前四時三十分大本營着電に曰く、敵は九連城西北高地に於て、再び抵抗を試みしも、午後一時五十分より退却を初め、軍の右翼隊(十二師團)は大樓房、中央隊(近衛師團)は蛤蟆塘、左翼隊(第二師團)は安東縣に向ひ、又軍の總豫備隊は、遼陽街道を前進し、午後八時軍は安東縣より、老古溝を經て、梨樹溝に亘る線を占領し、特に蛤蟆塘附近にて、三面より敵を包圍し、激烈なる戰鬪の後砲廿門、馬匹車輛悉皆、將校二十餘名、下士卒多數を捕虜とせり。

我に對せし敵は、狙擊歩兵第三師團の全部及同第六師團の第廿二、第廿四聯隊とミシチエンコの騎兵旅團砲約四十門、機關銃八門にして、鳳凰城方面に敗走せり、我軍の死傷は多くも將校下士七百ならんと目下取調

戰利品

軍團長以下の死傷八百

摩耶艦隊

中。

戰利品速射砲廿八門、小銃及彈藥等多數あり、我砲兵の効力は、頗る偉大にして捕虜將校の言に依れば、昨今両日の砲戰に於て敵の軍團長サスリッチ、師團長カシケリンスキーは共に負傷し、其他捕虜騎兵中佐の言に依れば、敵の死傷は八百以上なりと云ふ摩耶艦隊は、午前十時より、安東縣下流に至り、敵の砲兵と約三十五分激戰の後、之れを退却せしめ、午後二時龍巖浦に歸れり。

當軍司令部は、午後五時三十分九連城に至る、殿下以下各將校極めて元氣、軍隊の士氣大に振ふ以上取敢ず報告す。

五月二日午前十二時發同三日午後〇時五十八分大本營着電に曰く、昨一日午後、敵は我追擊に對し、頗る勇敢の抵抗をなし、爲めに我軍の死傷は、更に三百を加へたり、又た此の敵は、最終の時期に至るまで奮戰し其砲兵約二中隊は、人馬の大半を失ひ、遂に閉鎖機の要部を破壞し、白旗を掲げて降伏せり。

敵白旗を掲げて降伏

捕虜將校の確言によれば、蛤蟆塘附近の戰鬪に於て師團長（カシタリンスキー）及び狙擊歩兵第十一、第十二聯隊長狙擊砲兵大隊長は戰死し、其他高級將校に死傷多し、敵は數回の打擊によりて、全く潰亂して退却せしもの〻如く、昨夜來各處に逃竄しありたる敵の投降するもの多く、捕虜の總數今や將校（ロウエフスギー中佐）以下約三百、内健康者十、下士以下約三百、内健康者二百、其詳細及び我軍死傷の姓名確報は取調中。

師團長以下の戰死

第一軍へ優詔を賜ふ。

東宮殿下第一軍へ命旨を賜ふ。

第四回大本營會議。

瑞典那威中立規定追加。

韓帝祝詞。

露國公債暴落。

五月二日

第三次旅順口閉塞の大成功

強風雨

總指揮官林中佐

閣議○[illegible]

東郷聯合艦隊司令長官報告に曰く、聯合艦隊は豫定の如く行動し五月三日午前三時四時の交を以て旅順口第三次の閉塞を決行せり閉塞船隊及之を掩護せる赤城（艦長海軍中佐藤本秀四郎）鳥海（艦長代理海軍中佐岩村團次郎）第二驅逐隊（司令海軍中佐石田一郎）第三驅逐隊（司令海軍中佐土屋光金）第四驅逐隊（司令海軍中佐長井群吉）第五驅逐隊（司令海軍中佐眞野巖次郎）第九艇隊（司令海軍中佐矢島純吉）第十艇隊（司令海軍少佐大瀧道助）第十四艇隊（鵲、眞鶴を缺き第六十七號艇第七十號艇を加ふ司令海軍少佐櫻井吉丸）は二日夕刻艦隊と分れ豫定航路を旅順口に向ひ前進せしが不幸にして午後十一時頃より南東の强風俄かに起り波濤高く爲めに閉塞船隊は離散し相失ふに至れり閉塞船隊總指揮官海軍中佐林三子雄は船隊の集合到底見込なきを認め閉塞事業休止の命を下せしも其の信號通達せず午前二時頃迄通信に盡力せる間に船隊は相前後して既に旅順口沖に達せり然るに三河丸（指揮官海軍大尉匝瑳胤次）は港外を偵察せる敵の砲火を見て前續船既に港口に突進せる者と思考し直に港口に向て邁進し佐倉丸（指揮官白石良江）と思はしき者之に續く敵は港口附近に敷設せる視發水雷を發火し强力なる探照と猛烈なる砲火とを以て之を防禦せしも三河丸と港口防材の一部を破りて奥深く水道に闖入し中央の好位置に投錨爆沈し佐倉丸と思はしきもの港口尖岩の附近に投錨沈沒す之に次で遠江丸（指揮官海軍少佐本田親民江戸丸（指揮官高柳直夫）小樽丸（指揮官野村勉）相摸丸（指揮官湯淺竹次郎）愛國丸（指揮官海軍大尉大塚太郎）朝顔丸（指揮官向菊太郎）も相次で港口に向ひ猛進す此時敵の防禦砲火猛烈を極め其敷設水雷は前後左右に爆發し閉塞隊員の戰死負傷するもの最も多かりしが遠江丸は港口防材に衝突し船首を東にし殆んと港口の半部を閉塞して其位置に爆沈し江戸丸は港口に達し將よ投錨せんとする際高柳指揮官は腹部を射られて戰死し指揮官岡海軍中尉永田武次郎直に之に代

三河丸

佐倉丸

遠江丸

江戸丸

小樽丸に相摸丸

愛國丸

朝顔丸

閉塞隊員の最後

り投錨を命じ次で爆沈せり小樽丸相摸丸と思はしきものも亦港口に入りて沈没せるものゝ如く又愛國丸は港口より約五鏈のところに於て敷設水雷に罹り瞬時に沈没し指揮官附内田弘、同機關長青木好次以下八名行衛不明となれり朝顔丸と思はしきものは舵機を損したるものゝ如く港口に達せずして終に黄金山下に爆沈せり右八艘の閉塞船の内五艘の港口に入りて爆沈せしを以て港口は少くとも巡洋艦以上の通航に對し充分閉塞せられたるものと認む。

今次の閉塞事業は天候の異變と敵の防備増大したるとに依り前二回のものに比し頗る惨烈を極め戰死負傷は甚だ多く特に小樽丸相摸丸佐倉丸朝顔丸四隻の閉塞隊員は一も收容する能はず其最後の勇行さへ之を知るに由なかりしは遺憾至極なりと雖も其忠烈の事績は永く帝國の史乘に特記すべきものありと信ず閉塞隊員の收容に從事したる各水雷艇隊及驅逐隊は翌朝まで風濤と戰ひ敵に抗して能く其任務を盡し特に水雷艇隊は港口に接近して閉塞隊員の約半部を收容せり此難業中第六十七號艇（艇長海軍中尉平眞雄）は敵彈に漏管を破られ負傷卒三名出し一時敵前に於て進退自由を失ひしが其僚艇第七十號（艇長海軍大尉森本義寛）は之を救助して曳行せり又蒼鷹（司令兼艇長海軍中佐矢島純吉）も敵彈に左舷機を傷けられ卒一名戰死し隼にては下士一名戰死せり其他驅逐艦水雷艇には一も損傷なし。

六十七號艇の損傷

艦艇の損傷

第三戰隊（司令官海軍少將出羽重遠）は三日午前六時第一戰隊（司令長官海軍中將東郷平八郎司令官海軍少將梨羽時起）は午前九時旅順口港外に達して驅逐隊水雷艇隊を掩護集團し午後四時まで各方面に分れて閉塞隊員捜索收容に盡力せしが終に得るところなかりし此日濛氣頗る深く爲に敵狀を見ること能はず夜に入り我艦隊は各其集合地點に引上げ四日朝より更に豫定の行動を續行せり。

五月四日

皇后陛下第一軍へ令旨を賜ふ。

日本公債の暴騰。

五月五日

陸兵上陸掩護

加賀丸の坐洲

前進根據地

陸戰隊の上陸

五月五日午後六時廿五分前進根據地發電片岡第三艦隊司令長官報告の要領に曰く、昨四日第三艦隊集合地を發し、豫定の如く行動し、今五日第二軍第一梯團を前進根據地に護送し、只今陸軍兵を掩護揚陸中なり、支那船頭の言に依れば陸上の敵兵は約百を出でざるもの、如し。

加賀丸は昨日午後三時頃第三艦隊集合地附近に於て、坐洲せしも秋津洲の助力に依り浮出で五日午後五時無事前進根據地に到着せり。

五月五日午後十時前進根據地發細谷第三艦隊司令官報告の要領に曰く、我第七戰隊第廿水雷艇隊及香港丸日本丸の二隻は、豫定の如く五日午前五時三十分、遼東半島の前進根據地に着す、敵の監視兵らしきもの數名を其沿岸丘上に認たるを以て少時是れを砲擊したる後、野元海軍大佐の率ゐる陸戰隊の上陸を命じたるに、時恰も干潮に會し、端舟陸岸に達する能はざる爲め、皆な身を躍らして海中に入り、水深膝に達する所、約千米突の間を徒渉して、午前七時廿二分陸に上り、直に前進したるが、遂に一彈を發せずして、高地一帶の地を占領し、日章旗を其の絶頂に樹立せり、此れと同時に赤城、大島及び鳥海をして上陸點側方の陸岸に接近し、牽制行動を執らしめたるに、赤城は百餘名の敵兵を發見し、直に是れを擊攘して其二三を倒したるもの、如し。

日章旗を樹立

第一梯團揚陸開始

五月六日

陸軍輸送船隊第一梯團は、午前八時五分日章旗の高地に飜るを見て、直に揚陸を開始したるに、齊しく深水を冒して、最も活潑に上陸し、尙ほ目下益々進捗を計らんが爲め棧橋築設中にして、我戰隊は全力を以て是等作業の援助に從ひつゝあり。

日本外債募集說あり。

アレキセーフ總督旅順を去る。

開議。

栗野公使着京。

普蘭店の占領
旅順の行通斷絶
鳳凰城の占領
衛生材料遺棄

京城に於て大祝勝會あり。

倫敦日本協會大宴會を催ふす。

英國女官マコーレー孃入京。

遼東半島上陸軍報告に曰く、我一支隊は五月六日、小數の敵を擊攘して普蘭店を占領し、鐵道電線を破壞して、旅順との行通を切斷せり。

第一軍黑木大將報告に曰く、

一、五月六日我騎兵斥候は、鳳凰城東北に於て、敵の騎兵を襲擊し、死者三名、傷者數名を生せしめたり。

二、同日又た我騎兵は二臺子、三臺子、四臺子の敵を擊退し、歩兵の一部隊を以て、鳳凰城を占領せり、報告によれば、遼陽街道沿道の家屋は多くは燒失せられたり。

三、敵の退却途上に、八馬逃走したる衛生材料遺棄しありたるを以て、之を當軍に收容し、彼我傷者の治療に使用し、又た敵の衛生部員數名は

彈藥庫火藥庫を燒く
敵の投降續々
第一軍支隊の寬甸城占領

其の希望により之を負傷者の救護に使用せり。

四、敵の鳳凰城退却の際、彈藥庫火藥庫を燒きたり、七日に至るも森林及び村落内洞より出て來り、我れに投降する敵の敗殘兵、續々として絶へず、又た敵自から埋葬したる墓地も尠なからず、土人の言によれば、去る二日擔架にて、鳳凰城を通過せし敵の負傷者は、約八百なりしと、之によりて見れば、敵の損害は、確かに三千以上なりしならん。

第五回大本營會議。

東鄉聯合艦隊司令長官に勅語を賜ふ。

五月七日我ゞ支隊は寬甸城を占領せり。

十一日午前六時、我歩兵の一部は雪裡站より退却する敵騎三百餘を攻擊し、負傷せる中尉及卒二を虜にせり。

此騎兵は後貝加爾哥薩克騎兵師團に屬しある「チ、ンスキー」聯隊なり、中尉は「ボ、ツリー」大將の子にして、近衛騎兵「コンスタン」聯隊に在りし

も希望に依りて、轉職したる者あり、斯の如き士官い尙多數ある由。

五月八日

日曜出御。

市内各新聞社の發起にて東京市民祝捷大會を開く。

韓使李址鎔退京。

帝國政府英米資本家と外債一千万磅の假契約を倫敦に締結す。

五月九日

外債を締結す

無線電信研究者。海軍中佐外波内藏吉及木村駿吉、松代松之助、立石彌五郎、野俟寛治の諸氏以下に勳章を賜ふ。

五月十日

露國騎兵安州に來襲す

五月十一日大本營着電原口司令官よりの報告に曰く、我增援隊の一中隊は、十日午後一時安州に着し、早朝より戰鬪中なる守備隊を援け、午後七時迄共に戰鬪を繼續し、戰鬪前哨を以て夜を徹せり。

十一日午前六時過、嘉山及肅川より將校の率ゆる一部隊安州附近に現はるゝに至り、敵は价川及順川方向に退却せり、守備歩兵の一部は目下追擊中なり、吾兵戰死四負傷六敵の死傷は五十以上に達し、捕虜下士一名あり、該捕虜の言によれば、敵はコサック騎兵にして其數五百ありと。

五月十一日

五月十二日

大窰口の掃海

威嚇砲擊

測量從事

閣議。

栗野公使謁見。

外債募集の勅命下る。

露國棉花を戰時禁制品と爲す。

萩の浦丸擊沈に決定。

十二日大連灣の隣灣なる大窰口方面に出動せる片岡第三艦隊司令長官報告の要領に曰く、十二日午前七時四十五分艦隊大窰口沖に達して解列嚴島、日進、宮古は陸上の威嚇砲擊を行ひ第二第六第二十第二十一の四水雷艇隊は海面の掃海を開始せり。

第十二水雷艇隊は、十一日夜旅順口封鎖に從事し今朝八時三十分大窰口外に來會直に測量に從事し、其間煤窰附近に現はれたる敵の歩兵約一中隊騎兵約五十を砲擊退せしに敵は二三の監視哨を止めて我動作を候ふ

太沽山上陸

宮古艦の砲擊

ものゝ如くなりしも敢て發砲せざるを以て午後二時無事測量を結了せり第四十七號第四十四號の両水雷艇は大窰口内西岸に沿ふて敵狀を偵察しつゝ掃海を行へり、然に太沽山半島八三〇呎山の北西山麓を通過する電線を發見したるを以て砲擊掩護の下に、海軍少尉堀田文雄は、下士卒四名を率ゐ、艇用端舟にて上陸し、電柱五本を破壞し、其電線を奪ひ歸れり、土民に就き太沽山の麓に九十五徐家山方面に一百、尚ほ其内方に一千の敵あるとを聞知し、煤窰の東方約二千五百米突に進航して陸岸を砲擊せしに徐家山と五五〇呎山との中間より敵の歩兵約二百現はれ前進し來るを以て、其近接を待ち砲擊せんとせしに敵は海岸を距る數百米突の他物に據り敢て前進せず暫時にして敵の騎兵十一煤窰の南西方約二千米突に現はれたるを以て之を砲擊遁走せしめたり我に死傷損害なし宮古は深灣に進入しロビンソン角の北西八〇〇呎山に敵の哨所あるを發見し之を砲擊破壞したり敵は其後方に約十小隊伏在し居りたるも共に狼狽遁走せり。

第四十八號艇の爆沈

第四十八號第四十九號の両水雷艇は大窰口東岸に沿ふて掃海中午前八時黑嘴子の南々西二分一西約八鏈の地に於て敵の機械水雷を發見、百方之を爆沈を勉めしも、其効なきを以て、艇を後退せしめ、更に爆沈を試みんとして作業中、正午過二十七分、該水雷俄然猛烈なる爆發をなし、爲めに第四十八號艇は両斷し、約七分時にして沈没の不幸を見るに至れり各艦は直に救助艇を出し、附近にありし水雷艇と共に、其救助に盡力せしも、終に十四名の死傷者を出すに至りしは實に遺憾に堪へず。

黑嘴子と沙蛇との結線上に於て前記の外尚ほ機械水雷三個を發見し之を爆沈せり。

艦隊は午後六時一と先作業を中止して集合地に歸港せり、此行動中各艇隊は艦隊掩護の下に危險を冒し掃海及測量を遂行し且つ敵を擊攘して其交通機關を破壞し、多少陸上の防備を偵知し得たるも不幸にして第四十

八號水雷艇は敵の機械水雷の爲め沈没したるは深く遺憾とする處なり。

倫敦及紐育に於る日本公債募集締切。

アレキセーフ總督はダルニーの船渠埠頭を爆發の旨報告來る。

五月十三日

第三艦隊司令長官片岡七郎氏より大本營に着せる電報の要領左の如し。

五月十四日

大窓口の掃海

第五戰隊及第二水雷艇隊（第四十五號艇を缺く）は五月十四日早朝大窓口沖に至り、我艦隊掩護砲火の下に、聯合掃海艇隊を放ちて掃海を續行す。

敵は去る十二日、ロビンソン角九〇〇呎の高地に在りたる監視哨を撤退したるものゝ如くなりしも、大沽山北東三〇呎の北東側に、新に假設砲臺を急造して、野砲約六門を備へ、又同山の東側に掩堡を設け、歩兵約一中隊を配備する等、應急防備に努めたるもの、如く、終日頑強なる抵抗を爲せり。

此日掃海艇隊は、終日敵の機械水雷敷設面内に在て、敵の砲火を冒し、能く其任務を遂行し、水雷五個（内三個を爆沈し他の二個を爆沈す）を破壞し又我艦隊の砲火は、陸上の敵に多少の損害を被らしめたり。

然るに午後四時三十五分作業を中止し、掃海艇を收容せんとするに當り敵の機械水雷不幸にも、宮古の左舷艦尾に觸れ、轟然爆發して、艦體に大破を被らしめ、死傷者廿四名（内戰死下士卒二）を出し艦躰も、亦二十三分時の後、沈没するに至りたるは、深く遺憾とするところなり。

宮古艦水雷に觸り沈没

五月十五日

再び大窓口掃海

五月十六日午後五時三十五分大本營着電片岡第三艦隊司令長官報告の要領左の如し。

第五戰隊並に第六水雷艇隊（五十六號艇を欠く）は、十五日大窓口に至り、豫定の如く掩護射擊の下に掃海を決行せり陸上に於ける敵の防備は野砲二三門を增加したる外、昨日と大差なく、屢々野砲及び小銃の一齊射擊を以て、作業に妨害を加へしも我に一の損害死傷なし。

本行動中、敵の機械水雷八個を發見し、之を破壞す、内五個は爆發したる

り、發見せし敵の水雷の位置より判斷すれば、敵はもとより角を秘蛇との結線上に不規則に三線の水雷を敷設せしもの、如く、同海面の安全を確實にする爲め、尚ほ掃海を續行する見込あり。

東郷聯合艦隊司令長官より軍艦初瀬及吉野遭難に關し、大本營へ達せし報告の要領左の如し(十五日午前十時五分大本營着電)

本職は茲に三度不幸なる變災の報告を進達するを遺憾とす、十五日午前五時、千歳出羽司令官よりの無線電信報告によれば、本日午前一時四十分頃、第三戰隊は、旅順口封鎖の任務より歸航中、山東角の北方海面に於て濃霧に遭ひ、春日は吉野の左舷艦尾に衝突し、吉野は侵水甚しく終に沈没せり春日より出したる救助艇にて收容されたる者、機關長以下約九十名なりと、濃霧未だ霽れず痛心に堪へず。

十五日午後六時大本營着電に曰く、本日は海軍に在て最大不幸の日にして茲に又最も不幸なる報告を進達するの止むを得ざるに遭遇せり初瀬、

吉野艦の沈没

初瀬艦敵の水雷に觸る

第二水雷に觸り沈没

敷島、八島、笠置、龍田は本日午前十一時頃、旅順口沖にて敵を監視中、初瀬は敵の水雷に罹り、先づ舵機を破られ、初瀬より曳船送れの電信に接したるを以て、將に之を發送せんとするとき、更に敷島より、初瀬は第二の水雷に罹り沈没せりとの悲報來れり、本職は之を報告するに臨み、只た遺憾至極と云ふ外なし、善後の處置に就ては、夫々出來得る丈けの手段を盡し、災厄を增大せざるに努め居れり、當地附近濃霧未だ霽れず。

十五日午後十時三十分大本營着電に曰く。敷島は初瀬遭難狀況報告の爲め今當地に歸港しつゝあり、驅逐隊全部及二個水雷艇隊は敵の驅逐隊に當り且つ溺者救助の爲め午後一時三十分當地を發して旅順口方面に向へり霧未だ霽れず。

十六日午後四時三十七分大本營着電に曰く、初瀬が敵の水雷に罹りしは老鐵山の南東約十海里の所にして、當時同方面には、霧なく、又其附近に敵の驅逐艦もあらざりしと云ふ此事實より判斷する時は、敵は其附近

敵驅逐艦の追擊

生存者の收容

に機械水雷を沈置したるか或は又潛水艇を利用したるものならん、初瀬は約三十分間を隔て、二回の被害にて、瞬時に沈没したるも、敷島、八島、笠置、龍田、等にて、梨羽少將、中尾大佐以下、三百名を救助收容せり、初瀬沈没の頃、敵の驅逐艇十六隻旅順口内より出て來り、我を追尾せしが會々其地に來りし、明石、千代田、秋津洲、大島、赤城、宇治及高砂は前記諸艦と協力して、之を擊退し、初瀬生存者の收容を果すことを得たり、以上の報告は混信の爲め文意不明瞭なる無線電信と、今朝遭難報告の爲め來りし龍田の少尉亜に八島の艦載水雷艇指揮官の口頭報告等を綜合して製作したるものあり、當地近傍霧未だ霽れず。

十八日午後零時四十分大本營着電に曰く。昨朝濃霧霽れ、各隊逐次入港す、其報告により初瀬は全く敵の機械水雷に、罹りしものなることを、確かむることを得たり。

五月十九日午後九時二十分大本營着、蓋平方面砲擊に關する東郷司令官報告の要領左の如し。

渤海灣侵入

金州灣侵入

本職は明石、秋津洲、千代田、須磨、大島、赤城、宇治及第十四水雷艇隊を率ゐて十五日早朝出發し、正午前旅順口沖に至りし時、初瀬が二回敵の機械水雷に觸れ、沈没したるの報に接したるを以て、先つ大島、宇治及水雷艇隊をして、豫定の行動を續行せしめ、他の諸艦を率て、敷島八島、笠置等と共に、敵驅逐艦の我に向て、來襲せんとするものを擊退し、又初瀬乘員收容の援護を爲せり。

夕刻に至り、我艦隊は旅順口を去り、豫定行動に移り、渤海灣に進入し十六日正午塔山附近に近つき、金州角附近一帶の沿岸を偵察し、陸上多少の敵兵あるを認め、之を砲擊す、敵は直に遁逃せり。

十七日午後我戰隊は、掃海を行ひ、金州灣に侵入し、砲艦をして灣頭に進み、鐵道架橋及恰も此時通過せんとせる運兵列車、其他敵の建設物を砲擊せしむ、其結果何れも多少の損害を與へたるものと認む。

五月十六日
十三里溝の敵兵

五月十七日
三十里堡占領

五月十九日
五月二十日
肖金山の激戰
擊退

五月十九日大本營着公報に曰く、十六日金州北方十三里臺の戰鬪に參與せし敵は、速射砲八門を有し、歩兵の數は未詳なるも、狙擊歩兵第五、第十四、第十六聯隊の各一部にして戰場に將校以下三十の死體を遺棄せり、捕虜の言に依れば、敵の死傷は三百以上なりと、我衛生隊の收容せし敵の死傷は將校一、下士以下五なり、捕虜の言よ依れば、金州半島に在る敵は歩兵第四師團の大部及歩兵第七師團の全部にして「ステッセル」は防禦司令官として半島に在り「アレキセーフ」は本月始め奉天に向つて去れり、又旅順には我海軍將校一、下士卒三十繫留し在りと云ふ。

第二軍三十里堡、九里庄、陳家屯を占領す。

我艦隊金州灣の掃海を行ふ。

我陸軍大孤山上陸を開始す。

五月二十日大本營着公報に曰く、遼東上陸軍の歩兵隊より出せし山田大尉は、部下一小隊を率ひて、金州東方肖金山の敵情偵察をなせしに其北方よ於て敵の歩兵約二小隊と衝突、約三十分間激戰の後、敵兵を擊退したり、此戰鬪に於て小野寺少尉外下士卒四名戰死し、山田大尉外下士卒八名負傷せり、敵の死傷は將校一、下士卒約四十乃至五十名なり。

在浦ボカチール孤の破壞

五月廿日大本營に達したる確なる情報に據れば、在浦鹽斯德露國艦隊中最大快速力を以て有名なる、巡洋艦ボカチールは浦塩斯德港外に於て霧の爲めに坐礁破壞せりと。

玉家屯よて敵兵を擊退せ

(參照)ボカチールは千九百年獨國ステッチンなるブルカン會社の製造に係り速力廿四浬を有し、十五珊速射砲十二門、七封度五珊速射砲十二門四十七ミリ以下速射砲十門水雷發射管二門を有し排水量六千六百七十五噸にして、其速力の優秀なるは露國は勿論其製造國なる獨逸に於ても此種の艦としては、世界唯一と稱し誇稱し居るものなり。

五月二十一日午後大本營着電、大孤山上陸軍の報告に曰く、二十日午後七時、敵の騎兵約一中隊大孤山の北方約二里半に在る玉家屯附近に顯は

敵兵を捕虜す

れ、我歩兵の包圍攻撃を受け潰亂せり、敵の死傷多數、大尉一名を捕虜と爲せり、我死傷なし。

敵中隊の潰滅

又五月廿一日大本營着電太孤山上陸軍報告に曰く、五月廿日午後我歩兵の爲め包圍攻撃せられし敵は後貝加爾哥薩克獨立旅團の内ウエルフヂウジンスキー聯隊の第三中隊にして捕虜將校二等大尉一、中尉一、下士以下四、敵の遺棄せし死躰大尉(中隊長)一、下士以下九、捕獲せし健馬九死馬二十二にして敵兵捕獲の際、我兵卒一名戰死し、敵は岫巖及沙里寨方向に敗走せしもの、如し。

廿四日大本營着電太孤山上陸軍報告に曰く、二十日王家屯附近に於ける戰鬪に於て、敵の將校は或は戰死し、或は捕虜となり、部下は支離滅烈し、其後戰場附近部落に於て追々敵の死傷者を發見し、又土人の言に依れば、馬匹おく殆んど軍人の態度を爲さゝる敗兵の逃走するを見たりと察するに敵の中隊潰滅に歸したるもの、如し。

第一回旅順口強行偵察

五月二十日午後十一時五十五分東郷聯合艦隊司令長官より大本營に達せし報告の要領に曰く、砲艦の一隻及驅逐艦水雷艇の數隊は、二十日午前一時、旅順港口に迫り、要塞の猛烈なる十字砲火を冒し、強行偵察を試み、其目的を達し、天明に至り引揚げたり、艦隊に多少の被砲彈ありしも、著しき損害おく、又死傷者なし。

驅逐艦曉の損傷

唯驅逐隊中、曉は敵の破烈彈を被り、戰死者海軍大尉末次直次郎以下二十四名を出せり、其他は總て無事なり。

五月廿一日

寛甸城附近の敵兵撃退

大本營着電黑木大將報告に曰く、廿一日朝寛甸の東北約三里頭道溝に於て、我歩兵一小隊は、敵騎二百と衝突し、之を鏖陽邊門方向に撃退せり、敵の死者二十、馬四、我兵死傷なし。

敵將校捕獲

大本營着電黑木大將報告に曰く、湯山城東南の山城子附近にて、我補助輜卒隊分隊長外五名は、二十一日チヽンスキー第一聯隊第四中隊長一等大尉スウヤトポルクミルスキー及軍曹一を捕獲せり、彼は偵察の爲め、

高家屯にて敵兵壓殺

張家屯にて敵騎捕獲

金州南山の敵情

徒歩にて深く我後方に進入したるものなり。

大本營着電大孤山上陸軍報告に曰く、某歩兵隊より大石橋子（土城子より沙里寨に通ずる道路上）に派遣せる將校斥候は昨二十一日午後五時頃高家屯（大石橋子の南約二吉羅）附近にて敵の敗竄兵約十騎に遭遇し之を壓にせり、又某歩兵隊より五道講（土城子の東南約四吉羅）に出せる將校斥候は同地の南約二吉羅にある張家屯にて敵騎二名及馬七頭を捕獲せり。

金州附近に於ける敵の陣地攻撃に關し該攻撃軍司令官の大本營に報告したる要領左の如し。

五月廿一日午後大本營着電司令長官の報告に曰く、金州附近の敵は、時々緩慢なる射撃を行ひ、我を誘致せんとするものゝ如し、目撃する處によれば、金州南山には、十五珊以上の榴彈砲四門、九乃至十五珊舊式加農十門、十二珊速射砲二門あり、尚ほ大なる野戰砲臺あるも、備砲不明なり、山上には少くも、十個の砲臺或は堡壘あり、其首線は北方及東北方に向ひ、鐵條網及地雷も、北麓及東麓にあり。

前記砲の種類員數は、敵の射撃により、偵知せしものなり、又彈片により判すれば、十珊五及八珊五の舊式砲あり、十珊五の彈丸は、八千五百米突に達せり。

五月廿二日

五月廿二日午前大本營着電報告に曰く、攻撃軍は本日（廿二日）豫定の運動に着く。

攻撃軍前進

五月廿三日

日曜出御。

皇后陛下赤十字社篤志看護婦人會へ行啓。

第二回國債一億圓發表。

スクリドロフ浦盡に着。

五月廿三日午前大本營着電報告に曰く、攻撃軍の金州に向ふ前進は、豫定の如く、實施しつゝあり。

敵陣地の偵察
和尚島の重砲
柳樹屯の倉庫
九里庄の探照燈
敵の砲種

五月廿四日午前着電、攻撃軍は本日(廿三日)九里庄、陣家屯、簗子河の線の後方に集合し、參謀將校をして、敵の陣地の偵察を爲さしめ、又本夜(廿三日)より明日に亘りては砲兵陣地及其進入路の偵察を爲さしむ。

五月廿四日午後大本營着電報告に曰く、本日(廿三日)爲したる偵察の結果左の如し。

敵の右翼和尚島よは、約八門の重砲海に面しあり、砲種不明、其内若干門は東北馬家屯方向を射撃するを得。

柳樹屯附近には大なる倉庫あり。

南關嶺の東方高地線には、短小なる敵の散兵壕の如きものあるを見る。

九里庄南方後營、左營、洋砲營には探照燈ありて、時々我陣地を照明ず

今日まで敵の發射せし砲彈の破片によれば、二十珊砲、十五珊短加農、十珊半加農、八珊加農、六珊加農、七珊六速射砲等なり、又本日偵察將校に向ひ、徐家山砲臺に向つて射撃せし砲彈は、曲射砲にして、其口徑九珊位なり。

南山の東側閻家屯の附近より、山の北麓を經て西北に廻り、劉家店の東北約千米突までは、一面に鐵條網あり、之より左翼には防禦工事を見ず金州には少許の歩砲兵あり。

南山の鐵條網
金州の歩砲兵
我艦隊の應援

五月廿五日

金州總攻撃

五月廿五日午前着電報告に曰く、艦隊よりの通報によれば、艦隊一部は明二十五日我軍の攻撃に連繫して金州南方ある南山を攻撃すべしと。

五月廿六日午前着電、攻撃軍は本日(二十五日)豫定の如く第一線を龍王廟、三里庄、陳家店、王家屯の線に進め、午前五時半頃より、同九時に亘り、金州を攻撃し、又南山の敵砲と交戰す。

金州附近の敵狀に變なく、敵砲兵盛んに我隊を捜射し、目下尚ほ時々我を砲撃中なるも、我損害大ならず、軍は明朝金州南山の敵を攻撃せんとす。

軍の攻撃に連繫して、金州附近を砲撃すべき、艦隊の一部は、本日來ら

す。

乃木中將參內、陸軍將官以下拜謁。

清國赤十字社創立。

露國が水雷を領海以外に撒布したるに對し英米の非難を招く。

煙草專賣局官制發表。

五月廿六日

金州占領

五月廿六日午後着電報告ヨ曰く、彼我の砲戰は、二十六日早朝より、約五時間に亘り、其間我軍艦三艘も金州灣に至り、我に協力し、又敵砲艦一艘は大連灣に在りて、我左翼を砲擊す、而して今や砲兵戰酣にして、金州のみは午前五時二十分、我有に歸したり。

南山の占領

五月二十七日午前四時着電報告に曰く、攻擊軍は、二十六日激戰の後、南山を占領し、目下敵を追擊中。

敵の防禦工事

大本營着金州攻擊軍報告に曰く、攻擊軍は豫期の如く、廿六日早朝より南山の敵を攻擊せり、然るに該高地の防禦工事は、半永久にして備砲の如きも、大小口徑約五十門の外、速射砲二中隊を有し、歩兵を二段若くは三段に、銃眼と掩蓋を有する散兵壕に配備し、其要點には機關砲を備へ、頗る頑强なる抵抗をなせり、我軍は之に對して、全野砲を配列し、先づ敵の砲臺に向つて射擊を開きしに、午前十一時頃敵の重ある砲兵は沈默せり、但し速射擊は早く南關嶺の高地に退き、夜に至る迄我を射擊せり、我砲兵は敵の散兵壕に向つて、全力を集中し、我歩兵は小銃射程内に入りて、猛烈なる射擊を行ひ、敵前四百乃至五百米突の線に迄接近せり、然るに前面には鐵條網と地雷及び壕あり、且敵の歩兵射擊、殊に機關砲の射擊は少しも萎靡せず更に約二百米突に近接し、障碍物の間隔に向つて、數回行ひし突進も將校以下皆な敵前二三十米突の間に斃れて、敵線に達するを得ず、更に砲兵を以て準備射擊を行ひ、續ひて夕刻に及び、最も猛烈なる砲火を施し、之と同時に最後の突擊を行ひたるに、辛ふじて一方を破り、之れより前線高地に上り、遂に敵を擊退して陣地の

最後の突擊

主とあるなとを得たり。

此日我砲艦四隻、金州灣より我に協力し砲臺を砲撃し、敵の砲艦一隻は大連灣にありて、我左翼を砲撃せり、此攻撃中尤も幸なりしは、南山の東麓よりある地雷の電纜を發見して之を切断し、爆發するを得ざらしめたるに在り。

地雷の電纜を切断す

敵は堡壘内及最後の戰闘に於て、約四百の死者を遺棄せり、堡壘及び砲臺に備付しある砲は、悉皆之を鹵獲せり。

三師團の總攻撃

迅雷風雨

五月廿八日午後九時五分大本營着電、奥大將の報告左の如し。

軍は豫定の如く廿五日を以て、攻撃準備を終はり、同廿五日夜半より運動を起し第四師團を右翼に、第一師團を中央に、第三師團を左翼に併列し、金州南山に向つて前進せしむ此夜迅雷風雨咫尺を辨せず、運動頗る困難なりき、同時一部隊を以て、金州城を攻略せしむ廿六日午前四時三十分、砲火を開始す可き筈なりしも、濃霧の爲め五時三十分全砲兵は内山少將の指揮を以て、南山に向つて砲撃を開始し、六時頃より我艦隊の四隻は金州灣より此の砲撃を援助せり、敵は全備砲を以て之に應戰し、茲に激烈なる砲戰を交へ、約三時間の後南山の敵火大に減衰せり。

南山鐵火の減衰

茲に於て各師團の歩兵は前進を起し、一進一止し、敵の砲火を冒し、敵の第一線を去る約三百乃至五百五十米突の地に達せり。午前十一時敵の露天砲は、我猛烈なる砲火に因り、悉く沈默せしむ、速射野砲約二中隊は、疾く退却して、南關嶺の高地に據り、終局に至る迄時々我を射撃せり、午前十時頃、敵の砲艦一隻、和尚島砲臺東方に來り、午後二時頃迄我第三師團の左側背を砲撃し、且つ小蒸氣艇五隻に搭載せる陸戰隊を、紅土涯附近に上陸せしめんとせしも、我が一部之に向ひしを以て、遂に歸還せり、又南山南方大房身にある敵の九珊米砲四門は、午後七時頃迄我第三師團に向て、砲撃を繼續せり、我左翼にある砲兵之と應戰せしも距離遠くして、充分の効力を現はす能はず、敵の占領せる南山の陣地は

露天砲の沈默

敵の速射野砲

敵の砲艦

敵の陸戰隊

半永久築城

地雷と鐵條網

陣地交換

第三師團の危急

彈藥將に盡きんとす

脇襲

嶮峻なる高地線に半永久築城を施し、大小砲約七十門、機關砲八門を備へ連續圍繞せる數層の堡壘線には、銃眼を穿ちたる掩蔽部を造り、此の前方には數多の地雷及鐵條網を設け、且つ此の間隔を補ふに、多數の機關砲を以てせり之に對する我砲兵は全力を擧げて、之が破壞に努力し、又數々陣地を交換して、敵に近接し、以て歩兵前進に勢力を與へたりしも、敵歩兵の抗抵は、頗る頑強なりしを以て、午後五時に至る、此の時我歩兵の爲め未だ突擊の進路を開くに至らず、又我左翼にある第三師團は、敵の包圍を受くるのみならず、敵は漸次其歩兵を左側前に增加し、且つ南關嶺にある敵砲二中隊は、此の攻擊を援助し益々師團の左側に迫らんとす、而して我が携行砲兵彈藥は將に盡きんとし、戰鬪を繼續するを能はざるに至れり、依て已むを得ず、歩兵をして損害を厭みず、强襲を行はしめ、砲兵は補充し得る彈藥を盡して敵を猛射せしめたり、我第一師團の歩兵は、意氣衝天の勇を鼓して、敵陣に向ひ突擊せしも、敵の

苦戦

我艦隊の應援

高地線占領

銃尖相接す

南山攻略

大房身火藥庫爆發

敵の兵力

猛烈なる砲射を側射により、多數の死傷者を生じて、前進を繼續するを得ず、既る苦戦に陷りしが、恰も宜しこの時金州灣に在る我艦隊は、敵線の左翼に向つて、更に猛火を開き、砲兵第四聯隊に協力し、敵火の撲滅を努め、第四師團は此機に乘じ、全力を擧げて、敵の左翼に迫り、先づ高地線に進む、茲に於て第一及第三師團は、是に協力し全線を擧げて勇奮突入し、累々たる死屍を超へて、敵壘に肉迫し劍尖相接するに至る迄激戰して、遂に南山を攻略して、各堡壘上に國旗を飜せり、時に午後七時過なり、敵は潰亂して旅順方向に退却せり、此退却に當り敵は大房身の火藥庫を爆發したり。

軍は一部を以て敵を追擊したる後、全隊戰場に露營す、此時士氣大に振ひ、萬歲の歡呼諸方面に起り、砲兵は全力を盡して敵を追擊す。

我に對せし敵の兵力は、野戰軍約一師團、野戰砲二中隊要塞砲兵海軍兵若干なり、察するに敵は旅順及大連灣を掩護する爲め爲し得る限り南山

敵の死傷五百

捕虜と戰利品

我軍死傷三千五百名

海軍慰撫の詳報

砲戰開始

の陣地に依り、我が前進を防止せんとを勉めたる者にして、尚其防禦工事を增加するの計畫ありしが如し、敵の死傷は不明なるも、戰場に遺棄せし死躰のみにても五百名に下らず、捕虜は將校以下若干名、又戰利品は砲約六十八門、機關砲十門、發電用蒸滊機關一個、電氣燈三個、ダイナモー一個、地雷鐵鎖約五十個、其他小銃及彈藥諸材料等なり、其の詳細は目下取調中、我軍死傷將校以下約三千五百名。

終りに臨みて海軍の有力なる援助に對して深く好意を謝す。

廿七日午後十時半大本營着東鄉聯合艦隊司令長官報告に曰く、唯今入港の第一水雷艇隊が齎したる西山分遣艦隊の戰報左の如し。

分遣隊は二十五日正午金州灣に達せしも波浪高かりしを以て、蘇家屯敵壘の攻擊を見合せ、一地に假泊して風波を避けたり、二十六日午前五時頃より天候漸次靜穩に復し、第二軍は黎明より砲戰を開始せしを以て、午前六時赤城、烏海及び第一艇隊も、干潮水淺きに拘はらず、海岸に近きて

分隊長戰死

敵砲壘の沈默

陸軍徒步の掩護

南關嶺砲擊

之に協力し、連續敵壘を砲擊せり、此戰鬪の初期、敵彈烏海の前甲板を擦過し、爲めに分隊長海軍大尉河野通雄負傷し、下士以下二名戰死二名負傷す、午前八時海面より望見し得る敵の砲壘は一時殆んと沈默せしを以て、砲擊を中止し更に第一艇隊の一部はシャオヘ河附近の鐵道線路を砲擊し、他の一部は漲潮に乘じ、航路を測深しつゝ、筑紫平遠を嚮導して海岸に近づき、我陸軍右翼の一部か、砲火を冒して淺水の海中を徒涉し、壯烈に前進するを掩護せり、午前十時より分遣艦隊は、再び全力を以て敵壘を砲擊し、同十一時敵は殆んと退却し、我陸兵既に蘇家屯高地の下に達せる如くありしを以て、再び砲擊を中止したり、筑紫、平遠は落潮に際し吃水許さゞる爲め、漸次沖合に出て赤城、烏海及水雷艇隊の一部は、依然留まりて敵を監視せり、此間我艇隊は第二軍の右翼と連信連絡するを得て、蘇家屯の敵兵は既に全く退却せしも、尚南關嶺附近にある敵の陣地を砲擊するの要あるを知り、更に赤城烏海をして、進に之

を砲擊せむ、此砲擊中敵彈烏海の艦側に爆發し、艦長林三子雄戰死し少尉佐藤巳之吉外下士卒三名負傷す、但し艦體には損害なし、其他の艦隊には一も損傷なし、午後七時三十分分遣艦隊は戰鬪を止め艦隊集合地に向け歸航せり。

五月廿八日東鄕聯合艦隊司令長官より左の電報あり。

一昨廿六日第六戰隊が旅順口の敵を監視中旅順より出づる「ジャンク」を臨檢し露國陸軍々人等より發送せる數十通の書翰を押收したり其內一將校の書翰中に五月廿一日露國驅逐艦（原文は複數なれば二隻又は以上ならん）旅順口外にて爆發沈沒せり又他の書翰中に初瀨は其の遭難の前夜露國某海軍大尉の指揮せる驅逐隊を以て敷設したる機械水雷に罹りたるものなるとに付稍詳細の記事を載せられたり。

東鄕聯合艦隊司令長官は、廿六日を以て、遼東半島南部を封鎖し、左の宣言を爲したり。

本官は帝國政府の命を受け、明治三十七年五月廿六日、清國盛京省遼東半島南部即ち貔子窩より普蘭店に至る一直線以南の沿岸を、帝國軍艦の十分なる兵力を以て封鎖し、之を維持すること、並に封鎖を破らんとする一切の船舶に對し、國際法及帝國と他の中立諸國との條約に於て許容せられたる一切の强制手段を用ふべきことを茲に宣言す。

五月廿六日　帝國軍艦三笠に於て

聯合艦隊司令長官海軍中將　東鄕平八郎

金州攻擊軍公報、五月廿七日午後大本營着電に曰く、軍は本日（廿六日）午前五時廿分、金州城を奪取したる後、南山の敵を攻擊し先づ露天堡壘の砲兵を沈默せしめ、午後七時遂に該山を占領せり。

敵は南山堡壘砲臺を圍繞するに、掩蓋を有する塹壕を數層に構築し、堅固の防禦と、最新の兵器を有して、頑固の抵抗を試み、我軍の行ひたる數回の突擊も効を奏せず、午後三時最後の行ひたる突擊に至て、遂

大房身の地雷火

十六時間の激戰

我艦隊の援護

に其陣地を棄て、南關嶺方向に退却し、金州の一部大房身の停車場は、敵の地雷の爲め破壞せられたり、我將卒は本日(廿六日)能く十六時間の激戰に堪に、猛烈なる銃砲火を冒して、敵陣に突入したるの勇氣は、特に之を報告す。

此攻擊中に我軍艦四艘參與し、敵砲臺の砲擊に有力なる援助を與へたり

五月廿七日午後大本營着電東鄕聯合艦隊司令長官報告に曰く、今當集合地に歸航しつゝある西山分遣隊指揮官よりの無線電信に據れば、分遣艦隊(筑紫、平遠、赤城、鳥海並に第一水雷艇隊)は一昨二十五日午後六時金州灣に達し、二十六日黎明より第二軍に協力して、蘇家屯高地の敵壘を砲擊し、就中赤城、鳥海の二艦は、其淺吃水を利用して、終日戰鬪に從事せり、午前十一時に至り敵は蘇家屯の高地より退却せしも、尙其後方收容陣地より發砲繼續し、我陸軍は夕刻迄敵壘に迫るを認めざりしも、午後八時頃之を占領するを見たり、我艦隊の損害は戰死鳥海艦長林三子雄外死傷九名にして、艦船には差したる損害なし。

閣議。

五月廿七日

南關嶺の占領

敵ゲルニーを棄つ

戰利品

柳樹屯占領

攻擊軍大本營着電報告に曰く、軍は今朝(二十七日)午前十時三十分中村少將の指揮する一枝隊(歩兵砲兵及工兵より成る)を派遣し、南關嶺を占領し、主力は本日南山附近の諸部落に宿營し諸隊の整頓を計り、準備出來次第、豫定の線に向つて前進せんとす、敵は旅順方向に退却し、其一部は今朝三十里堡(青泥窪西北方)の停車場を守備しありしが、午前十時頃同停車場を燒きて、旅順方向に退却せり。

昨二十六日の戰鬪に於ける戰利品の主なるもの、大小口徑砲約五十門、敵の遺棄せし死者のみにても、約四百、我死傷約三千內外にして、目下尙ほ取調中。

廿八日午後大本營着電、奥大將發報告に曰く、二十六日、我に對せし敵は、歩兵第三、第四、第五、第十二、第十三、第十四、第十六聯隊、騎

高麗門の捕獲

東要塞砲兵、鐵道護境兵五中隊及若干の海軍兵なるが如きも、兵力は未だ詳ならず。

右の敵兵は二十六日夜三十堡に宿營し、夜半より滦車にて、旅順方面に退却せし者の如く、目下利革鎮堡以東に其跡を止めず、又黄金山砲臺に、は敵兵もなく、備砲もなし。

中村支隊に屬する一部隊は、廿七日柳樹屯を占領し、同地に於て火砲四門、同彈藥若干、鐵道貨車（有蓋五、無蓋四十一）を鹵獲せり。

廿九日午前大本營着電、黒木大將報告に曰く、廿七日午後六時、高麗門の西南代家堡子に於て、オルグンスキー第一聯隊の少尉ロゴフスキーの及兵卒七を捕獲せり、此者等は賽馬集より、徒歩よて偵察に來りし者にて、其長官はレチンカンデなり、又此少尉は元と龍騎兵第一師團に屬し同師團の九名の士官と共に、四月十四日ベテルスブルグを發し、五月四日遼陽に下車せしものなり、少尉の言に依れば、過日來敵の將校斥候、

單家屯の衝突

我が背後に來り捕獲せらるゝ、又は死傷せしもの若干あり、稀れには歸還するものあり、此冒險的行動は、長官の嚴明に依るとは雖も、又ゲヲルギー勳章を得んが爲め、自ら進んで出づるもの少からずと。

五月廿八日 蓋陽邊門占領

本日遼陽街道上單家舖子に於て、我將校斥候は、徒歩せる敵の射擊を受け、卒一、馬二、負傷せり、敵は單家舖子北方の高地よ退却せり、其數約二千なり。

三十日午前大本營着電黒木大將報告に曰く、吉田支隊は、二十八日午前十時より、蓋陽邊門に在る敵兵二千（砲兵なし）を攻擊し、同十一時半、之を擊退して追擊中、他の一部隊到着して之に加はり、全く該地を占領せり、敵の主力は賽馬集方向、一部は掛牌嶺方面に退却せり。

敵の死傷は未だ詳ならず、我損害は吉田支隊に於て、下士以下戰死三、負傷二十二、此戰鬪に參與したる他の一部隊は、下士以下戰死一、負傷六なり。

金家堡子の衝突

本日午前八時、遼陽街道上の我騎兵斥候は、金家堡子に於て敵騎八を射撃し、馬二を斃し二を捕獲せり、又海城街道上の歩兵斥候は、午後一時沙子崗の北方約一里に於て、敵騎五に遭遇し、其一騎を馬と共に斃せり

沙子崗附近の衝突

五月廿九日

元老會議。

第六回大本營會議。

吉野初瀬戰死將校の葬儀を青山墓地にて行ふ。

五月三十日

第二次強行偵察

五月三十日午後八時三十分東鄕聯合艦隊司令長官發電報告の要領左の如し。

軍艦四隻、驅逐隊二、水雷艇隊二、は本日(三十日)午前一時旅順口港外に達し、敵要塞の砲火を冒して更に港口の偵察を強行せり。

此偵察中第三號砲艦は敵彈を受け、戰死下士一名、負傷下士卒三名を出し、砲一門を損せり、其他の艦艇には一も損傷なし。

敵は老虎山頭に新に探照燈を据ゑ、又其の山腹には一二の砲臺を新造せるを發見せり。

ダルニー占領

三十一日午前大本營着電奥大將報告に曰く、其後の報告によれば、青泥窪には完全ある倉庫兵營百餘棟あり、電信局停車場も無事にて、客車貨車を併せ二百餘輛は使用し得べし。

但し附近鐵道の小橋梁は凡て破壞しありと。

又船渠及棧橋も完全なるものあるも、大棧橋は既に破壞されて海中に沈み居り、船渠口には小濱船を沈めありと。

曲家屯附近の衝突

四日午前大本營着電遼東半島上陸軍報告に曰く、我騎兵隊は五月三十日正午頃、曲家屯に於て、敵の騎兵得利寺附近にあるを知り、之を擊破せん爲めに歩騎兵より成る一部隊をして、先づ田家屯に於て敵騎、約三中隊あるを攻擊せしめ、敵兵退却するや騎兵一部隊をして、之を追擊せしめしが、此迫擊隊は、張家屯にて更に新たなる敵騎二中隊をも併せ破りて

龍王廟に出でたる時、敵の歩兵五六中隊、騎砲兵一中隊の陣地を占むるに會し、騎兵隊は再之を攻撃し、午後三時敵を得利寺方向に撃退せり、

李家屯の衝突

敵は西伯利コサック騎兵第八聯隊に屬するものにして、此夜我騎兵隊と

五月卅一日

觸接して得利寺附近に停止せり。

六月一日

六月三日午前大本營着電、遼東半嶋上陸軍報告に曰く、我騎兵隊は去る三十日午後零時三十分頃、普蘭店北方約九里許りなる李家屯附近に於て敵の歩兵一、二中隊騎兵五、六中隊騎砲兵一中隊と衝突し、交戰約二時間の後ち終に之を北方に撃退せり。

六月二日

閣議。

清浦農相官邸に於て懇話會を催ふす。

第六月

元山京城間電線截斷に關し林公使より韓廷へ照會す。

露國黑龍地方關稅免除を公布す。

元山附近の衝突

六月三日

閣議。

六月四日午後大本營着電、原口陸軍少將の報告に曰く、元山より敵狀偵察の爲め、文川方向に出でし歩兵の一隊は、三日午後一時敵騎約二十二三騎と、文川の南方に於て衝突し、其五名を斃し、之を北方に撃退せり。

曲家屯附近の衝突

六月四日午後大本營着電、遼東半島上陸軍報告左の如し。

我騎兵隊は、六月三日曲家屯附近に位置し敵狀偵察中、午後零時三十分頃より、漸次敵歩兵の厭迫を受るに至りしより、急に各隊を警急集合して、陣地に就かしめ、午後五時半頃まで、歩兵約二千、騎兵若干、砲兵一中隊より成る敵を拒止して、遂に之を得利寺方向に撃退せり、

新開嶺附近の衝突

我が損害は下士卒即死四、負傷四なり。

六月五日午前大本營着電、黑木大將の報告左の如し。

蠶陽城にある我隊は、六月三日案馬集方向偵察の爲め、一小部隊を派遣したりしが、午後二時頃、此の偵察隊は、新開嶺の西方に於て、敵騎五

六百に遭遇して之を撃破し、敵に多大の損害を與へたり、我には下士以下戰死一、輕傷三ありしのみなり。

旅順口方面敵情及敵の無線電信に關する東郷聯合艦隊司令長官電報の要領左の如し。

六月四日

旅順の敵情偵察

封鎖の爲め旅順口沖に出動中なりし高木千歳艦長よりの無線電信報告よ依れば、老鐵山頂に檣四本及哨舎あり、其内一本の檣に無線電信用の「ガーフ」の如きものを認むと、又今四日朝以來旅順口方面に當り、數回の大爆聲を聞き、黑煙の盛に揚るを見たりと云ふ、石田第二驅逐隊司令の報告に依れば、南三山島沖にて、敵の機械水雷を認め是を爆沈せしめたりと。

旅順口沖に出動中の高木千歳艦隊の電報に依れば、花隍城嶼及大欽島には、無線電信柱の如きものを見す、又本日(四日)午後七時過ぎ更に旅順方面に當り、數回の大爆聲を聞きしも煙は認めざりしと云ふ。

掃海艦の掃海

六月五日午後着電、東郷聯合艦隊司令長官報告の要領左の如し。

今朝封鎖任務より歸航したる第五驅逐隊の報告に依れば、昨四日午後七時四十分同隊が東方より旅順口港外を監視中、ギリヤークの如き敵の砲艦一隻、旅頭山の前面に於て、爆烈沈沒せり、多分我水雷に罹りしものならん。

ゲレミヤスチーの沈沒

尚ほ他に敵の砲艦一隻驅逐艦流艇等數隻、港外に在りて掃海事業に從事せるものゝ如くなりしが、皆愴惶港内に入れりと云ふ、

六月七日午後大營本着電、東郷聯合艦隊司令長官報告に曰く、今朝封鎖任務より歸來したる第四驅逐艇隊司令長井祥吉の報告に依れば、一昨日午後七時四十分旅順口外に爆沈したる砲艦はゲレミヤスチー形にて、同驅逐隊は當時鮮生角に近づき、敵狀監視中、嶗嶗嘴砲臺より十數發砲撃を受けしを以て、少しく南方沖合に之を避けしに、港外にありしゲレミヤスチー形の砲艦、我に向ひ砲撃しつゝ進行し來りしが、幾許もなく城

ガイダマークの沈没

頭山の南方約一海里と思はるゝ所にて、大爆煙を擧げ沈没せり、又其側にありしガイダマーク形の一砲艦も、同時に其艦影を沒せり、敵は城頭山老鐵山山下に沿ふて頻りに掃海を施行しつゝありしものゝ如く、掃海艇と思はるゝ船艇は城頭山下に群集し、尙數艇の老鐵山の東方に運動するを見たり、是等の舟艇は砲艦の爆沈と共に、愴惶港内に遁入せり。

第四驅逐隊は數個の近彈を受けしも一の損傷なし、以上當時の狀況重て報告す。

六月六日午後九時三十分大本營着電、片岡第三艦隊司令長官報告の要領左の如し。

大崗口村の占領

四日大連灣掃海隊の一部は、北三島及大崗口村を偵察したり、其報告に依れば、北三山島には家屋なく、又何等敵の設備せるもの無し、大崗口村には敵の電信所あり、土民の言によれば、敵は十數日前通信器具を取外し、遁逃せり、而して其退去に際し、飲料水源に毒を投じたりと、依て目下精細探査中。

六月五日

日曜出御。

内田公使袁世凱に勸告す。

韓廷平安、忠淸、黃海の漁業權を特許す。

千家屯の衝突

七日午前大本營着電大孤山上陸軍報告に曰く、全州街道上范家屯に在りし一小部隊は、六月五日朝大孤山西北約十キロメートルに在る千家屯に於て敵の騎兵約三十を掩擊し、之れを西北方に潰亂せしめ、兵卒二、馬四十三頭を捕獲せり、敵は西比利哥薩克第五聯隊の第二中隊に屬するものなり。

六月六日

少將山田彦八第三艦隊司令官に補す。

皇后陛下東京慈惠病院へ行幸。

大連灣掃海

大連灣の掃海に關し聯合艦隊司令長官東鄕大將より、大本營着電の要領左の如し。

四十二個機沈

有望なる航路の發見

第三次旅順口强行偵察

大連灣の掃海は、去三日以來南方長濤の支障ありしに拘らず、豫想外に進捗し、六日午後二時迄に發見爆沈せる敵の機械水雷數四十一個に及び、文官で敵の水路嚮導者たりし者を利用し、一の有望なる航路をも發見し已に小吃水船を航通せしむるを得るに至れり。尚ほ掃海隊は鋭意作業しつゝあり。

掃海隊員船舟凡て無事なり。

六月七日午後七時十分大本營着電、東鄉聯合艦隊司令長官の報告左の如し。

砲艦四隻は、豫定の如く、昨夜午前零時過ぎ旅順口港外に至りて、强行偵察を行へり、敵は猛烈なる砲火を以て、之を砲擊し、第四號砲艦は、敵彈八個を蒙り、多少の損害あり、卒一名戰死し、二名微傷を負ふ、其他は皆無事なり。

片岡第三艦隊司令長官報告に曰く、六日松島より陸隊戰を南三山島に上

南三山島の上陸偵察

陸偵察せしめたるに其報告概要左の如し。

燈臺は改造中を見受けらる、附近少量の建築材料あり、點燈器具なし、附屬煉瓦家屋四棟あり、內一は破壞他は床を毀ちあるも使用に堪ゆ發電機及び瀉罐は、爆發藥にて毀ちたる形跡あり、又鐵蓋を有する監視哨所らしき土工物一あり。

西灣の北角に二小埠頭あり、兩側崩潰しあるも船舟の接着に便利なり、同島北部南東麓に、大小五棟の煉瓦屋あり、即避病院なるが如し、屋內一物なく、床板窓戸扉等は、概して破壞しあるも、暖爐家根又壁は完全よして、多少の修理を加ふれば使用に適す、內一は消毒室にして、瀉罐及消毒罐あり、瀉罐は其儘にて使用し得るも、消毒罐の內筐は取外しありて附近に見當らず、外に二棟の亞鉛板家屋及貯水池一あり。

飲料水は露國人の穿ちたる井戸一、土人の使用する不完全のもの二あり共に濾過の後煮沸すれば飲用し得べしと信ずるも、水量多からず。

牛馬鷄豚多少得らる。

宮中に於て桂首相、多田、南両内閣書記官參列の上、左の如く親任式を行はせらる。

大將親任式

陸軍中將正三位勳一等　男爵　岡澤精

陸軍中將從三位勳一等功三級　男爵　乃木希典

陸軍中將正三位勳一等功三級　男爵　長谷川好道

陸軍中將從三位勳一等功三級　男爵　西寛二郎

陸軍中將正三位勳一等功四級　男爵　兒玉源太郎

任陸軍大將

海軍中將從三位勳一等功四級　東郷平八郎

海軍中將從三位勳一等功四級　男爵　山本權兵衛

任海軍大將

海軍少將正五位勳二等功四級　出羽重遠

中少將補任

海軍少將從四位勳二等功四級　齋藤實

海軍少將從四位勳二等功四級　瓜生外吉

任海軍中將

海軍大佐正五位勳三等功四級　小倉鉀一郎

海軍大佐正五位勳四等功四級　山田彦八

海軍大佐正五佐勳三等功四級　島村速雄

任海軍少將

露國第一軍團の動員命令を下す。

露國仲裁拒絶の聲明を出す。

六月八日午後十一時片岡第三艦隊司令長官より大本營に達したる報告左の如し。

大連灣の掃海

大連灣に於ける掃海隊は、昨七日十一個、今八日十個、敵の沈置せる機械水雷を發見し、孰れも爆沈したり、人員船舟異狀なし。

六月七日

バヤーリントノンニーの沈沒

寨馬集占領

（備考）掃海隊が作業開始以來、八日までに、敵の機械水雷を無効に歸せしめたるもの其數六十二。

六月八日午後四時二十分着電、片岡第三艦隊司令長官の報告に依れば、大連灣の掃海は、豫定通り進捗し、既に掃海面第一區を清め得たりと云ふ。又北三山島の西約千米突と南三山島の南西とに沈沒船あり、前者はバヤーリン、後者はノンニーと信ぜらるゝ。

六月九日午前大本營着電黑木大將報告に曰く。

一、我部隊は本月七日寨馬集附近にありし敵を、四方砬方向に擊退して午後三時寨馬集を占領せり、同地にありし敵は、歩兵一大隊と砲二門なり、我損害は戰死卒三、負傷下士以下廿四名、敵の損害は戰場に遺棄せし死傷廿三、捕虜將校二、卒五、其他土人の言によれば、敵の將校二、下士卒七十負傷せりと。

二、通遠堡方向に派遣したる我一部隊は本月六日午前、林家臺附近にて敵の歩兵五六十に遭遇し之を擊退せり又七日午後五時過より、約三時間戰鬪の後張家石附近にありし敵の歩兵約六中隊、騎兵三百を通遠堡方向に擊退せり、敵の死傷七八十、我戰死下士卒四、負傷十六。

去る六日以來遼東灣方面に行動せし東鄕第三艦隊司令官報告の要領左の如し。

分遣艦隊は旅順口背面沿岸の封鎖中、去る七日一部を北上せしめ、蓋州附近沿岸の威嚇砲擊を行へり、偶々塔山附近を南下する運兵列車ありしが、我砲擊に驚き再び北方に引返せり、爾後晝間は汽車の往復するものを認めず、蓋州角附近に於て、敵は我が上陸に備へんとするものゝ如く、歩騎兵漸次增加し、地物に據りて我を待ん[illegible]するものゝ如くなりしが、赤城、宇治の両艦淺吃水を利用し、急に海岸に接近して之を猛擊し多大の損害を加へしものゝ如し。

陸軍特別賜金賜與手續發布さる。

五月十五日露國が僞公使の手を經て、普國店にて病院列車を攻撃したりと我に注意し來りたるに對し、政府は五月廿三日其全く事實を顚倒したる誣言あるを言明す。

第二回偵察隊

東鄉聯合艦隊司令長官報告六月八日午後大本營着電に曰く、六月七日夜より、今曉に掛け、艦載水雷艇八隻を放て、更に旅順口の强行偵察を擧行せり、敵は之に對し多少の砲撃を加へ、八雲艦載水雷艇に、下士卒各一名の戰死者を出せり、其他損傷なし。

鮑嚴の占領

六月十日午前着電黑木大將報告に曰く、我一部隊は、昨八日午後太虎嶺附近に於て、敵を撃破し、同五時二十分大孤山上陸軍の一部隊と共同して、鮑嚴を占領せり、敵は兩部隊の前面にありし者を合せ、騎兵約四千砲六門にして、板木城蓋平方向に退却せり、我損害は戰死卒一、負傷池鯉歩兵中尉、下士以下二十一名にして、皆輕傷なり。

十日午前大本營着電大孤山上陸軍報告に曰く、我一部隊は、第一軍の一部隊と共に、八日午後鮑嚴附近に在りし敵を撃退して、午後五時二十分鮑嚴を占領せり、鮑嚴に在りし敵は、騎兵約千五六百、砲六門にして、其砲兵及騎兵の一部は、板木城方向に騎兵の大部は、蓋平方向に退却せしものゝ如し、我損害は戰死卒二、負傷三原少尉下士卒若干、

大連灣の掃海

十日午後七時大本營着電、大連灣掃海に關する片岡第三艦隊司令長官報告の要領左の如し。

掃海隊は八、九兩日間に敵の機械水雷十六個を發見破壞せり、我に一の損傷なし。

大嶋口には露國人の設備に係る貯水池約百坪のもの一、三十坪のもの三あり、何れも深さ約一尋、棧橋あり、鐵管を導き、通水に便なるも鐵管は露國破壞しありて、多少の修理を要す。

毒水の件は、纍きに露國人が退去に際し、毒を投じたりと密告したる支那人探偵を失ひたるを以て見れば、或は我軍に利便せしめざるの目的を

以て潮導水を吹聽もなるものに過ぎざるかの由にて嚴探中なれども敵情は

北學的試驗中なり。

東鄉聯合艦隊司令長官報告六月十二日午後大本營着電に曰く、第六戰隊は豫定の如く、去る七日八日の兩日蓋平角より熊岳河口附近に亘る海岸に出在せる敵を砲擊し、尙ほ遼東灣沿岸に於て多少の偵察を遂げ、今朝營地に歸着せり、其報告に依れば、敵は我が軍の蓋平縣附近に上陸するに備ふる爲め、其の沿岸は約三千の步騎兵を屯し、土民の言に依るに海岸の各所に監視哨を配置し居れり、孰れも我が艦隊の砲擊に逢ひ內地に逃遁せり、七日の砲擊中會々南行の滊車熊岳城の北方約三里にて停止し直に北方に引返せり、爾後八日迄滊車の通過するものを認めず、八日朝蓋平角附近に於て敵の步兵約二個中隊、騎兵約一個中隊の一群を猛擊し、多大の損害を與へたり、七日營口を出でたる外國滊船々長の言に依れば、此砲擊の爲め營口に在りし露兵三千、砲二十門は同地を撤退して、北方に去れりと云ふ、又八日第十水雷艇隊が復州灣にて捕へたる露兵二名は、興德縣萬家嶺を發し復州灣より乘船し、旅順口に向はんとしたるものにして、騎兵第四旅團第一聯隊に屬する騎兵なり其の言に依れば萬家嶺、瓦房溝、瓦房店には步兵二個聯隊、騎兵一個聯隊半、砲八門ありて、五月二十八日より同三十一日迄に二度に到着せり、其指揮官はサムソン少將なり、此兵力は土民か此附近に在る敵の兵數約五千と云ふに略ぼ一致す、又捕虜の言に依れば、南行の滊車は萬家嶺まで一日三四回通し居るも、其以南は稀れに瓦房溝迄徐行すと、捕虜は多數の公文を所持し居れり。

電報の上陸偵察

六月九日

皇后陛下より露國負傷兵に義手義足を賜ふの恩命ありたり。

六月十日

桂首相邸會合。

八日より本日にかけ旅順の清人千五百、十九隻のジャンクにて立退く、

閣議。

六月十一日

第二回國庫債券募集第一日。

露國芝罘領事館内に於る旅順と通ずる無線電信に對し抗議す。

日曜出御。

林駐韓公使歸朝の途に上る。

英國露國が米を戰時禁制品としたるに抗議す。

六月十二日

旅順封鎖隊の作戰

東郷聯合艦隊司令長官報告六月十二日午後大本營着電に曰く、聯合艦隊は依然旅順口の封鎖を强固にすると共に、上陸軍の後方を掩護し、時々分遣隊を以て陸上の敵に對し作戰す、發に遼東灣に特派したる、第六戰隊（赤城宇治及第十水雷艇隊を加ふ）は去る七、八兩日蓋平附近の沿岸に屯在せる敵を砲擊し、之に多少の損害を與へ、其任務を遂行して今朝當地に歸着せり、又封鎖勤務に服せる第四驅逐隊は、一昨十日午前より約二時間營城子双臺溝附近の敵兵を砲擊し、之亦多少の効果を見たり、

大連灣の掃海七十餘箇を爆沈す

又當時大連灣附近を巡邏せし第二驅逐隊は正午頃小平島附近迄出で來りたる敵の驅逐艦四隻を發見し之を鮮生角迄追尾せしが敵は急速背進して遂に旅順口に入れり。

大連灣及其附近の掃海は着々其歩を進め、今や既に其豫定第一期掃海面を掃除して、機械水雷七十餘個を爆沈し、將に第二期掃海に着手せんとす、公海に浮流せる敵の機械水雷は今尚ほ絶へず、今日迄我軍にて發見爆沈したるもの既に三十に下らず、是等の浮流水雷は風潮の爲め渤海灣にも流入し、第四驅逐隊は鐵島の北方に二個を發見して之を爆沈し、其他董家口にて三個浮流せりと云ふ。

近來の天候一週に一回濃霧あるを常とし、去る九日以來の霧は漸く今朝に至りて、霽れたり爲に我艦隊の行動に多少影響すと雖も麾下將卒は八方の及ぶ限りを盡して各其爲すべき任務を果し、幸に吉野沈沒以來一も危害を見ざるは深く本職の歡喜する所なり。

懷仁占領

六月十六日午前大本營着電、黑木大將報告に曰く、吉田枝隊の一部隊は十一日坎樣口に於て敵の乘馬步兵約一百を擊退し、十二日渾江左岸四個子に於て、敵の小部隊を驅逐し、午後三時懷仁を占領せり。

敵は步兵三百(捕虜の肩章は東部西比利亞第十五聯隊)馬賊三百にして、五道河附近に退却せり。

我兵死傷あし、敵の死傷は不明なるも、坎樣口に於ては即死三、負傷二(中一は捕虜とせり)ありし。

桂首相邸會合。

東郷聯合艦隊司令長官報告六月十四日午前大本營着電に曰く、聯合艦隊附屬水雷敷設隊臺北丸は、昨夜敵前に於て機械水雷沈設中、水雷一個俄然爆發し、左記の戰死者並に負傷者を出せり、船舶には大なる損害あし

臺北丸損傷

東郷聯合艦隊司令長官報告に曰く、山本大尉の指揮せる艦載水雷艇隊は第三驅逐隊及第一、第十四、第十六水雷艇隊掩護の下に、六月十三日午

第五次強行偵察

六月十四日

小平島の砲擊

旅順海戰

旅順の爆擊

後十一時三十分、更らに旅順口の強行偵察を行ひ各艇敵に發見さるゝあるとなく探海燈光の下を潛りて、豫定の位置に巧に機械水雷の沈置を了し本日無事當地に歸航せり。

露國六十一個軍區の豫備兵を召集す。

東郷聯合艦隊司令長官報告に曰く、土屋第三驅逐隊司令よりの報告に依れば、六月十四日同隊及第一、第十四、第十六水雷艇隊は、小平島附近に於ける我陸軍の威力偵察に勢援する爲め、今朝來小平島以西の陸岸に在る敵兵及敵の哨所等を砲擊しつゝありしが、午後零時三十分の頃、敵艦ノーウヰック及驅逐艦十隻、旅順口の方向より突進し來るに會し、各隊は盛に之と砲戰しつゝ、漸次退却して、敵を誘致せしも、午後三時頃に至り、敵は遂に引還せり、我に一の損害なく、各隊は日沒後、再び當夜の豫定哨區に進む、午後四時帽島附近に來りし千歲よりの報告に依れば同時旅順口方向に爆發及砲聲の聞ゆるを報せり、未だ其何の故あるを知

らず。

露國第十七軍團長ビルデルリング將軍莫斯科發東に向ふ。

某々五個聯隊軍旗授與式を行はる。

得利寺附近に於ける戰鬪に關する遼東半島上陸軍司令官の報告左の如し

報告(一)六月十五日午前大本營着電、軍の主力は本日(十四日)左右両縱隊となり、鐵道線路に沿ひ南部瓦房店の東に在りし敵を驅逐して北進せしが、午後五時頃敵兵更に北部龍王廟より大房身に渉る線に陣地を占め彼我の間に砲戰約二時間の後、我軍は龍家屯より虞河屯に渉る線を占領するに當り、日は暮れたり、我軍に若干の損傷あり。

本日軍の一部たる他の一縱隊は、敵の右側を脅威し、我側背を掩護するため、復州東方の地區を前進して、鄧家溝より那家嶺に渉る線に進出せり軍は明十五日一部をして敵の右側を脅威せしめ、主力を以て前面の敵を得利寺北方隘路に壓迫せんとす。

報告(二)六月十四日夜十二時六月十五日午前大本營着電、其後の報告に依れば、北部龍王廟より大房身に渉り陣地を占領しある敵兵は、漸次に增加し頑固の抗抵を試みんとするものゝ如く、軍は明朝戰を決せんとす。

報告(三)六月十五日正午六月十五日午後大本營着電、軍は豫定の如く今拂曉より得利寺附近の敵を攻擊し、目下戰鬪酣なり。

報告(四)六月十五日午後十時半發六月十六日午前大本營着電、得利寺附近の敵の兵力は約二師團にして、大房身より城子山に亙る陣地を占領し、軍は今十五日拂曉之が砲擊を開始し、其主力は鐵道線路に沿ひ、一部は鄧家屯方面より攻擊前進し、午前九時頃軍の左翼に在りし一隊は、東龍口方面より、正午頃騎兵隊は賈家屯方面より、共に此の戰鬪に參與して敵を得利寺附近に包圍して、激烈なる戰鬪の後之を北方に擊退し、軍旗及速射砲數門等の鹵獲あり。我死傷は昨(十四日)と本日とを合し約千八以内を算すべく敵の死傷は頗る多大なるべきも未だ詳あらず。

露軍我國旗を濫用す

分捕と死傷

報告(五)六月十五日午後十一時發六月十六日午前大本營着電、本日(十五日)の戰鬪に於て露軍は我國旗を濫用し、現に我將校斥候は露國兵の我國旗を樹て行進せるを目擊し、我歩兵は之を認めて射擊を中止せり。

報告(六)軍は昨十五日拂曉より得利寺附近に於て約二師團半の敵を包圍し、午後三時頃まで激烈なる戰鬪を繼續して、遂に之を北方に潰走せしめたり、未だ詳細の報告に接せざるも、速射砲十四門を鹵獲し、狙擊歩兵第四聯隊長以下約三百名を捕へたり、敵の戰場に殘せし死傷者は五百名に上るべし。

奥大將報告六月十八日午後大本營着電、六月十三日、軍は普蘭店、大沙河の線を出發し、右縱隊を大沙河に沿ひ、中央縱隊を鐵道線に沿ひ、左縱隊を吳家屯(復州街道上)四川溝、大河崖に通ずる道路に沿ひ、騎兵部隊を皮子窩、熊岳街道を前進せしめ、各縱隊は其進路上の少數の敵兵を驅逐しつゝ前進せり。

十四日左縱隊は、那家嶺附近に達す、右及中央縱隊は相連繫して、得利寺の南方約十二吉羅の趙家屯、大平溝の線に達し、敵兵大房身より北部龍王廟に渉る線を占領するを知り、更に進んで五家屯、廟家屯、虞家屯の線を占領し、午後三時頃より日暮に至る迄砲戰を繼續せり。

十五日軍は、得利寺附近の敵を攻擊せんが爲め、右縱隊をして宗家屯より、温家屯北方高地に渉る線を固守せしめ、中央縱隊をして、夜間を利用して、虞河岸附近より、大陽溝西方高地に前進せしむ、此朝濃霧あり午前五時三十分砲火を開始し、砲戰漸次激烈となりつゝある間に、中央縱隊の復州河以北の地區は、漸次苦戰に陷りたるも其攻擊前進は着々進捗し、加ふるに本日黎明、復州方面より急行せる歩兵及び砲兵より成る一隊は、午前九時三十分、王家屯四方高地に達し、中央縱隊と協力して午前十一時大房身附近の敵兵を驅逐するを得たり、然れども龍潭山々嘴及龍王廟高地にありし敵の砲兵は、猛烈に北方面を射擊し、中央縱隊及

び復州方面より來りし一隊は、此猛火を冒し、險崖峻阪を攀登して前進せるも右縱隊の右翼隊方面の敵兵は、依然優勢を以て我に當り、屢々攻勢に轉せんとせり、依て軍の總豫備隊たる歩兵を前後二回此方面に增加す。

之れより先き右縱隊の右翼隊の方面、危急を告ぐるに當り、騎兵部隊も亦右縱隊の右翼に到着し、之に連繫し、猛烈に敵の左側背を脅威せしめたり、敵は全く我包圍中に陷りしも、頑强にして屈せず、而かも敵の後續隊戰場に到着したるが如く屢々逆襲を以て戰況を挽回せんとせしも、遂に我軍の攻擊力に抵抗する能はず、午後三時頃より退却を始め、我追擊射擊により、潰亂せるも、軍は地形上激烈なる追擊を行ふを得ず、此夜戰場に夜を徹せり。

此日左縱隊の主力は、高家屯附近に於て、北方に對し陣地を占領し、軍の左側を掩護しありしが、午前十時五十分、敵の歩兵約七八百、馬家房身より西龍口を經て、吳家屯方向に退却するを知り、歩兵二中隊、騎兵一中隊を紅家屯東方高地に差遣し、之を待つ、午後一時頃に至り、敵兵豫想の如く、龍口後以西に退却し來るを以て大に之れに損害を與へたり。

此日戰鬪に參與せし敵の兵力にして、始めより陣地にありしものは、歩兵二十五大隊騎兵十七中隊、砲九十八門なるも、戰鬪間更に後方より增加せし部隊あり。

敵の死傷未詳なるも戰場に遺棄せし死屍は、右縱隊方面のみにて約六百にして軍旗及び速射砲十四門等を鹵獲し、捕虜は第四聯隊長以下將校六下士卒三百なり、又捕虜將校の言によれば第一軍團長輕傷、第一師團長重傷第一聯隊長戰死、第二第三聯隊長負傷せりと。

我軍の死傷目下取調中なるも千名以下なり、十五日の戰鬪は兵力約二師團宇、而かも堅固なる陣地に據るの敵を攻擊し、遂に之れを潰走に至らしむるを得たるは、偏に陛下の御稜威による。

浦塩艦隊の來襲

佐渡丸撃沈

常陸丸撃沈

六月十六日大本營着電沖の島今川主計發に曰く、佐渡丸十五日午前十時玄海沖にて、敵艦三隻の砲撃を受け、其結果戰鬪員は敵艦に來れ、非戰鬪員は本船を去れとの申込を受け、遭難者約七十名此地に漂着せり、糧食なし。

六月十六日大本營着電留守第十八師團司令部發、昨十五日常陸丸、長門丸、長門沖の島附近にて、敵艦に撃沈せられ、乘組員の一人、池部勇吉漁船に救はれ、頭部に彈片の輕傷を負ひ、山口縣阿武郡棒郷東分村に在りて、治療中との報告今着す。

六月十六日大本營着電在小倉遭難者發電、昨午前十時廿分、玄海灘にて我佐渡丸、常陸丸とも敵艦四隻に砲撃せられ、我が佐渡丸、常陸丸とも敵艦の水雷に、午後三時頃撃沈され、佐渡丸船長外數名敵艦に保留されたり。

百名餘は武内中佐の命にて、端艇にて免れ當市に着く。

常陸丸の最後

六月十六日大本營着電留守第十二師團司令部發、佐渡丸に乘組みたる、平崎陸軍技手以下十六名(内輜重輸卒一名を含む)漁船に救はれ十六日午後零時四十分、無事小倉に着す、又同船乘組員にして漁船に救はれしもの、約三十名ある筈なるも目下何れにあるや不明。

常陸丸乘組員三十名許も救はれ、若松に着せり。

本日(十六日)午後零時八分六連發通報によれば被難兵約三十名同地に上陸せりと。

六月十六日大本營着電門司發、土佐丸は常陸丸の遭難者三十七名を乘せ午後二時門司着委細取調中、又流船にて目下遭難地附近の捜索中なり。

六月十六日午後大本營着門司吉澤大尉報告に曰く、土佐丸は六連にて常陸丸の生存者三十七名を救助して入港す、軍曹田所龜松二等卒藤崎虎一及び火夫山頼辰二郎の報告によれば、常陸丸は十五日午前十時半頃敵艦三隻に追はれ全速力にて前進す、敵は初め空砲を放ち、引續き實彈にて

連續射擊し、死傷するもの多し、此際彈藥庫を開く間なかりしが、敵艦は更に接近し、側面より急射擊をなし、機關破裂、乘組者死するもの多し、又第三層より出火す、藤崎二等卒は分隊長沼里伍長の命により聯隊旗を保護せんとせしに、聯隊長須知中佐は已に軍旗を燒き、旗竿を碎き居られ、汝等は海上を泳ぎ歸りて、此旨を報告せよと命ぜられたるが、間もなく砲彈肩に中りて戰死せらる將校の大部は割腹、又はピストルにて自殺す、某中隊長は海に投ず、此間ボートを下す間なく、船長事務長海に投ず、監督將校戰死せり、二等運轉手自殺す、敵は更に第三回の急射擊を爲し、常陸丸は全く沈沒す、波高く敵艦の行衛不明なるも、佐渡丸は西北に向つて進行せり、其後一隻の漁船にて三十七名救はれ、六連島に來り、土佐丸に救はる（尙は一隻ボートあり、三十名許乘りし樣なるも、行先き不明、救助されたるは田所軍曹外兵卒三十四、火夫一、船內人夫一なり、內輕傷十二、稍重傷一あり、土佐丸にて本日宇品に遣る

須知中佐軍旗を燒く

將校の割腹自殺

佐渡丸の遭難

十七日午後大本營着電、在門司田村工兵大佐發に曰く、佐渡丸は十五日午前六時半馬關海峽を通過し、常陸丸と相並行して航進中同九時五十分敵の軍艦三隻の爲砲擊せられ、續いて包圍を受たる爲遂に停止し、非戰員の過半を端艇に移したる頃、露西亞號とも思はるゝ敵艦より、砲彈及發射水雷各一發を受け、機關部大破を來したり、此時常陸丸は敵艦二隻より烈しき砲擊を受け、火災を起し遂に沈沒せり、我佐渡丸は損傷部よりの浸水甚しく、將校以下　陛下萬歲を三唱し、軍刀又は拳銃を以て最後の準備を爲しつゝありしに、敵艦は更に第二の水雷を發射し、機關部に命中せるを見て、急に北方に向て退却せり。

茲に於て一同意を飜し、爲し得る限り避難するを得策とし、鋭意急造筏の製作と浸水の防遏とに從事し、尙且不良なる天候に苦められつゝ、三十時間海上に漂流し、十六日午後一漁船を發見して之に全員を移し、馬關に向ひ航行中、今朝救助船伊勢丸及日の丸に遭遇し、之に收容せられ

て正午門司に着せり。

小倉監督將校は、露艦に行き今川、西岡両主計、宮澤軍醫、小林、矢野中村の三事務官、小城、酒井、村田の三技師幷に判任官以下（船員共）約六百名は、前に退船せしも其後行方不明、死體を發見せる者三（内一は自殺）他の將校以下何れも無事、又本船漂流中端艇にて避難中ある常陸丸の下士以下五十二名を收容せり、同下士の言に依れば、同船輸送指揮官須知中佐は割腹して壯烈ある最期を遂け、他の將校は死んど全部砲彈の爲め戰死せりと、又該下士の大部負傷しあり。

又在門司山口少佐の報告に曰く、佐渡丸は十五日午前十時、六連島より三十哩の所に於て敵艦二隻に圍まれ、非戰鬪員は出來得る限り諭して本船を去らしめ、將校は敵艦の轟沈するに任せたり、敵は砲擊の後本船左舷に各一發の水雷を發射し、慌てゝ西方に引上げたり、此二發目の水雷は機關部に命中爆發せしも幸に沈没を免れ、今朝伊勢丸の援助を受け當

幸に沈没を免かる

地に着せり、將校は無事下士以下今取調中。

在門司吉澤大尉の報告に曰く、佐渡丸い尙使用の望みあるを以て、取敢ず應急手段として當地より排水器及必要の人員を佐渡丸に遣る筈、至急救助船差遣せられたし、司令部は當地に殘し置き下官は宇品に急行す伊勢丸にて百四十六名來る生存者總計四百三十九名、外に死體一及び入院後死亡一あり、將校の生存者當地に在る者左の如し。

田村大佐、川仁少佐、葛城大尉、豐島大尉、今村主計、武内中佐、星野少佐、西尾大尉、靜間大尉、牧野軍醫、吉野、古川、河内、貝瀨各技師、山口少佐、竹峯、平澤各大尉、岸主計、佐藤中佐、吉田、今西各大尉。

在長崎佐伯彪の報告に曰く、佐渡丸は十五日午前十時馬關より約五十哩北に於て、敵艦ロシヤ外二隻の爲砲擊さる、佐伯ヒウ（彪？）一戸恒吉、池上伊作、村木ケウイチ、山崎秀松、技手小倉次郎、山崎美一、雇員西田

政太郎、平岩ブセウ、杉山チヨウコウ、島田義三郎、笹川忠治、横山カチ太郎、山崎次鐵、三浦勝治、傭人卅三人及他部隊員十七人、計七十八水船に乘り三十二時間港上に漂よひ、十六日午後五時五十五分大島沖東經百三十度北緯三十四度の箇所にて、英國船タンバー號の救助を受け、今長崎要塞司令部に着く。

沖ノ島附近に出現したる敵艦隊に關する情報の主要なるもの左の如し。

十五日某哨艦より午前八時廿五分大本營着電に曰く、三本檣の浦塩艦隊三隻沖ノ島附近を南下せり。

十五日上村司令官より午前九時二十七分大本營着電に曰く、哨艦對馬より浦塩艦隊三隻沖ノ島附近に見ゆとの通信に接し、直に總艦を率ゐ出港す。

十五日角島より午前九時四十七分大本營着電に曰く、午前八時三十分沖ノ島附近に砲聲を聞く。

十五日角田竹敷司令官より午前十時二十分大本營着電に曰く、敵艦隊は今砲撃を連續しつゝあり、本部所屬水雷艇午前九時五十分出港せり。

十五日壹岐より午前十時二十九分大本營着電に曰く、午前八時四十分敵艦二隻壹岐沖に發見、砲聲數十發を聞く、帝國汽船二隻逃げ來る。

十五日角島より午後零時四十分大本營着電に曰く、海上朦朧として艦影を認め得ざるは遺憾なり、砲聲約三時間に渉る。

十五日角田竹敷司令官より午後一時四十七分大本營着電に曰く、風雨次第に增加し水雷艇の航行に困難と認む、雨の爲め一浬以外を見る能わず

十五日六連島より午後五時四十七分大本營着電に曰く、今、日の丸旗振丸は敵海上に在りと信號しつゝ西より東に引返す。

十五日壹岐より午後三時二十七分大本營着電に曰く、午後一時五十分敵艦東に走る行方不明。

十五日竹敷より午後三時四十五分大本營着電に曰く、風雨益强烈敵情に

就き得る所なし。

十五日壹岐勝本羽後丸より午後四時二十七分大本營着電に曰く、敵艦はグロンボイ、ロシヤ、リユーリクなり。

十五日六連島より午後五時廿五分大本營着電に曰く、幾内丸は博多に避難せり。

十五日福岡より午後九時二十分大本營着電に曰く、金澤丸は午前九時頃沖ノ島附近にて露艦を認め、筑前大島に避難せり。

十六日佐賀ノ關より午後四時大本營着電に曰く、第七水雷艇隊は遭難地に向け午後二時出發せり。

十六日隱岐島司より午後四時廿分大本營着電にく、知夫郡黑木村戸長の報告には、本村宇賀北方約十海里の沖合に怪しき軍艦四隻を認むと。又浦郷分署長よりの報告には、露艦らしき船三隻知夫郡宇賀村の北約二里に現はる、煙突二本不取敢報告す。

十六日隱岐北方郵便局より午後五時大本營着電に曰く、午後三時十五分一隻の滊船を先きにし三隻の三本檣の軍艦西に向け進行し、三時半頃更に北東に轉じ進行せり。

十六日鮫島佐世保鎮守府司令長官より午後七時四十八分大本營着電に曰く、沖ノ島にある遭難者救助の爲め第八號艇をして京城丸を率ゐ出今夜港せしむ。

十六日角田竹敷要港部司令官より午後八時三十分大本營着電に曰く、沖ノ島へ運送船及び遭難の狀況取調の爲水雷艇隊を派遣せり。

十七日沖ノ島より午前一時大本營着電に曰く、昨十五日午前六時敵艦ロシヤ、グロンボイ、リユーリク北より東水道に航しつゝありしが、七時五十五分南西約八海里の處にて、艦列を解き、一隻は小呂ノ島二隻は若宮島(壹岐)の方へ向へり、八時二十分二隻は霧の爲め船體不明となり、一隻は八時二十二分より發砲を始む、其目的とせしもの不明なりしが、

十時三十分に至り南方約十二海里の所に、一汽船東方に航するを發見せり、該汽船に向つて發砲せしものあり、該汽船は十時四十五分南方へ變針せり、十一時二隻とも霧の爲め船體不明となれども、砲聲は止まざりし、零時四十分まで追擊せしものゝ如し、佐渡丸遭難者昨夜五十二名漂着尙續々漂着しつゝあり。

十七日隱岐西郷より午前七時大本營着電に曰く、露艦の煙突は四本二隻二本一隻檣は三本二隻其他い不明、右認めたる時刻は昨午前十一時頃なり。

十七日角田竹敷要港部司令官より午前七時五十三分大本營着電に曰く、第十五水雷艇隊は本日午前零時三十分沖ノ島より佐渡丸遭難者陸軍一等主計今川彌吉、同三等主計西原遠壽以下七十七名を分乘せしめ歸港せり同隊は昨日午後一時二十分東方に砲聲聞ゆとの報告を得、沖ノ島に向ひ四時半同島に着し、以上の遭難者を乘せ歸りたる者にして、今川一等主計の報告に依れば、佐渡丸は十五日拂曉馬關を發し、沖ノ島の南方に於て前方に進航しつゝある常陸丸に追付かんとせる際、雨中に敵艦一發見し、常陸丸は後方に引返し佐渡丸も正に引返さんとせるに、忽ち両船共敵艦ロシヤ及グロモボイの砲擊するところとなり、常陸丸は約五六十發目に非常に白煙を揚げたり、多分火災を起したるものならん、佐渡丸は近距離に於て十數發の砲聲を受けたるも、一時砲擊を中止せるを以て本船を停止し、監督將校は敵艦に到りて交渉し、四十分間の猶豫を得各員退去すべきを命ず、而して非戰員は自艦に收容する事を諾せるを以て、船員を送りたるも、一等運轉手(英人)の外は凡て之を乘船せしめず、尙與へたる時間を經過せずして、敵は兩側より水雷を發射し、命中爆發せしめたり、茲に於て各乘員は凡て海中に投じ殆んど全員溺死し以上の七十九名は、幸にして本船の端舟に乘じ、風波に伴ひ七時頃同島に漂着し第十五水雷艇隊に乘艇せしめ、當地に來り當港へ避難中、南越丸に收容

せり、右人員は時機を見て還送する筈、常陸丸の遭難地は沖ノ島を距ること遠き爲め、今夕に至るも一名も同島に漂着せしものなし、又遭難者の同地附近を去りたる際は、兩船共未だ浮で居れりと云ふ、尙ほ三十六號艇及六十號艇ハ未だ同地附近搜索中なり。

十六日午後大本營着電留守第十二師團司令部報告に曰く、陸軍輸送中土佐丸常陸丸昨十五日午前十一時門司を去約四十浬の附近に於て、三隻より成る敵の艦隊に遭遇し、敵は常陸丸を擊沈し、佐渡丸の機關部に水雷部に水雷を命中せしめたる後北方に退却せり、佐渡丸は漂泊して今朝沖ノ島東方約六浬の所に在り、漸く沈まんとす、其救助として日の丸今當地を經過せり、常陸丸の乘組は殆ど殲滅せるものゝ如く、佐渡丸には下士以下數十名の死者あるべらん、今朝七時佐渡丸を發し、端艇にて今六連島に着したる川人工兵少佐報告す。

十六日午後大本營着電留守第十二師團司令部報告に曰く、十六日午後七時四十分門司發の電報に曰く、常陸丸及佐渡丸の遭難者十六名患者集合所に收容尙引續き上陸の筈。

十六日午後大本營着電在勝本村田技師報告に曰く、十五日午後十時露艦三隻に砲擊せられ、鐵道員三名外九名と避難して壹岐勝本に着く。

十七日午前大本營着電在門司吉澤大尉發に曰く、佐渡丸乘組川人少佐着同船將校は皆無事、今朝(十六日)七時約百名本船に在り、端舟に逃げたる者も本船に歸れる者多し、常陸丸乘込み十二名も佐渡丸に來れり、

上村第二艦隊司令長官報告六月十九日午後大本營着電に曰く、十五日午前八時哨艦對馬の無線電信に依り敵艦隊沖ノ島附近に現はれ、南方に航行するを知り、直に水雷艇隊を急行せしめ、對馬壹岐間の水道を警戒し西方より來る船舶に對し、竹敷に避けしむべきを命じ、又門司港務部に電報を發し、西航の船舶を停止せしむべきを傳へ、在竹敷及哨艦服務中の諸艦に、無線電信を以て、至急來會すべきを命じ本隊は對州南端を經

上村艦隊と浦塩艦隊

て急航せり、當時天候次第に險惡となり、暴雨之に伴ひ、屢々後續戰隊を見失ふに至りしが、神崎附近に至り、一艇隊を本隊に合せ、敵艦隊を北方より壓せんが爲め、針路を沖の島の北方に取れり此間哨艦對馬は、絶へず敵艦と觸接を保ち、敵情に關する報告を努めたり、正午哨艦對馬より、無線電信を以て、敵艦隊は沖の島南方約十五海里にありて、北西に航進すとの報に接し、次で濛雨の爲め敵影を失ふとの報に接す、午後一時半沖の島の南約五海里に於て、再び敵艦隊を發見せしも、濛雨の爲め直に之を見失ひたりとの報に接せり、依て針路を右轉し、敵艦隊の所在地たる沖の島の南方に邁進せしが、此時濛雨最も烈しく、視界益々狹きが故に、敵と會せば、直に接戰距離に入るべきを思ひ、益々各艦を戒飭しつゝ航進し、敵を搜索せしも、遂に之を發見するを得ず、此時哨艦對馬列に入るの報に接す、茲に於て本職は、敵艦隊が濛氣濃密なるに乘じ、既に北方に退却せしものと判斷し、之を追尾せんが爲め、針路を北方に轉ぜしむ、雨愈々烈しく、視界益々狹く、敵影を發見するの望み、殆んと絶ゆ、依て翌早朝敵の會戰するの望みを以て速力を增加し、敵の退路を扼するの地點に針路を定む、此間我艦隊諸艦が、高速力を以て濛氣四塞の間に、不規の運動を行ひ、毫厘の故障なかりしは、本職の滿足する所なり、此夜艇隊をして索敵運動を執らしめしも、其目的を達するを得ざりし。

上村艦隊空しく歸る

十六日黎明豫定地點に達す、此時天候回復し、視界亦廣かりしも、遂に敵の隻影を見ず、依て更に針路を轉じ、索敵運動を繼續せしも其効なく十七日敵艦隊は尙本邦沿岸に在るものゝ如きを以て、之を邀擊せんが爲め、巡洋艦隊を以て搜索列を張り南下せり、此日天候至て平穩にして、視界廣く心竊かに搜索の好望なるを期せしも、遂に敵艦隊に會せず、

同日午後對州の北端を距る、北東約百海里の地點に來りしに、無線電信に依り、敵は北海道方面にあるの情報に接したるが故に、索敵運動を止

め、今十九日歸港せり、此行動中約四晝夜の捜索運動は、遂に何等の功あくして、歸港の止むを得ざるに至りしは、深く遺憾とする所なり、終に臨み本職は、玄海灘に於ける遭難諸士に對し、深く痛恨哀悼の意を表するものなり。

英船アラントン號捕獲さる。

第二回國債募集締切、應募額三億二千四十九万圓に達す。

參謀本部會議。

山縣元帥桂首相を訪ふ。

六月十六日

水雷を爆沈す

秋月左都夫氏全權公使に任じ、瑞典諾威駐劄を命せらる。

獨逸軍艦二隻洞庭湖及翻陽湖の四個月租借を湖廣總督に申込む。

東郷聯合艦隊司令長官報告六月十八日午後五時大本營着電に曰く、一昨十六日午後一時、第四驅逐隊は老鐵山の南方約十海里に於て、敵の機械水雷三個を發見し、之れを爆沈せり、又同所に敵の假製水雷數個の沈置しあるをも發見し、共に之を擊破せり。

第二軍へ勅語を賜ふ。

臨時閣議。

六月十七日

得利寺敵の損害

二十日午前大本營着電奥大將報告に曰く、其後の報告に依れば、十七日夕までに得利寺附近に於て、我軍の埋葬したる敵の死屍は、總數一千五百十六名に上り、爾後續いて埋葬に從事しつゝありて、其總數は尚ほ著しく增加するなるべく、土人の言に依れば、敵は戰鬪中死傷者を滿車にて後送し、敗走稍前に至りては、花紅溝附近に埋葬或は火葬せり、又鹵獲の銃砲及捕虜の數も前報告より增加しあるも調査未だ終らず。

大山參謀總長並に兒玉次長參内す。

桂首相邸會合。

六月十八日

七盤嶺衝突

大孤山上陸軍報告二十日午後大本營着電に曰く、一昨十八日夜來、我軍より出せる步騎兵連合の斥候は、七盤嶺(岫巖の西方約十二里)附近及び

露艦北海に現はる

其他各所に於て敵と衝突し、敵の將校一兵卒二を捕獲し、五十餘名を斃し、戰利品小銃槍等數多あり、我戰死兵卒一、傷者下士以下五名。

函館附近に現はれたる浦塩艦隊に關する情報の主要なるもの左の如し。

浦鹽艦隊三隻、午前五時二十分小島沖を運動す。

今露艦らしきもの三隻、福山沖に現われ發砲せりと、松前郡江良村より電報あり。

敵艦南下し其影を失ふ。

敵艦は針路を北西に取り、其影を失ふ。

六月十九日

第七回大本營會議。

大山大將、兒玉大將參內す。

山縣大將、桂首相も亦參內す。

六月二十日

滿州軍總督部設置

皇后陛下皇太子妃殿下御手制繃帶下賜せらる。

大山大將滿州軍總指揮官に、兒玉大將滿州軍總參謀長に、山縣大將參謀本部總長に、長岡少將參謀本部次長に補せらる。

玄海沖遭難星野少佐參內遭難當時の摸樣を奏上す。

政友會運送船遭難事件に就き桂首相に警告を與ふ。

閣議。

參謀本部會議。

進歩黨運送船遭難事件に就き桂首相に警告を與ふ。

六月廿一日

敵驅逐艦二隻擊沈

皇后陛下東宮妃殿下御制繃帶下賜。

六月廿一日東郷聯合艦隊司令長官報告に曰く、二十一日午前八時頃旅順口港外に於て封鎖勤務に服せる第五驅逐隊が、港内より出たる支那船の清國人二名を抑留して詰問したる所によれば、三四日前敵の驅逐艦二隻旅順口港外約一里半の所にて作業中、敷設水雷に罹りて沈沒し、両艦の死傷百四十名計りあり、又新泰平號と稱する滊船も數日前港外にて作業中爆沈せりと云ふ。

熊岳城の占領

六月廿二日

敵軍の逆襲

遼東上陸軍の一部は蓋平の南方熊岳城を占領す。

滿州丸仁川に着す。

六月廿三日大本營着電黑木大將報告に曰く、約歩兵一聯隊、騎兵二聯隊砲兵一中隊より成る敵兵は、廿二日賽馬集より前進し、驛陽邊門に在る我一部隊を攻擊したるも、夜に入りて、新開嶺方向に退却せり。

窪田少佐は、此戰に於て戰死せり。

現に認めたる、敵の損害死五、負傷二十名あり。

清浦農相京濱實業家を招待協議す。

傷病兵八百三十六名廣島に着す。

韓皇尙德宮にて滿州丸乘組員に饗應す。

六月廿三日

三家河の占領

六月二十四日午後大本營着電、大孤山上陸軍報告左の如し。

六月二十三日拂曉、我軍の一部は、大石橋街道上、三道勾西北約四里の仙家峪に宿營しありし敵騎一中隊を奇襲し之を潰亂せしめ、尙ほ三家河北方高地を占領せし敵を擊攘し、午前八時三十分之を占領せり。

敵は死六十餘を殘し、西北方に退却し、下哈頭、湯兒勾附近に位置せし歩砲兵によりて收容せられたり、其兵數歩兵約二大隊、砲兵約一中隊なりき。

旅順の大海戰

六月二十四日午後十時大本營に達せし東鄕聯合艦隊司令長官報告の要領左の如し。

二十三日午前十一時、旅順口外にある哨艦より無線電信を以て、敵艦ペレスウェード外七隻、驅逐艦九隻、港口附近に出づとの報告に接し、特別任務に從事するもの、外總艦艇を擧げ發進す。

敵は戰鬪艦六隻、巡洋艦五隻、驅逐艦十四隻にして、南下を試みんとするものゝ如くありしも、日沒後に至り港口外に假泊せり。

昨夜我驅逐艦隊、水雷艇の大部分は、旅順口港外に於て、敵艦隊を攻擊し、少なくもペレスウェート型戰鬪艦一隻は、確沈したるものゝ如く、

ペレスウェートの確沈

セバストポリ、デアナの損傷

セバストポリ型戰鬪艦一隻、デアナ型一等巡洋艦一隻は、今朝曳かれて港内に入るを見たりとの報に接したれば、多分大損害を受けたるものならん。我艦艇には大損害なく、驅逐艦白雲は敵彈の爲め士官室を破られ戰死下士卒三名、負傷海軍少軍醫宮川正雄外二名を出だし、千鳥は後部瀉罐室に一彈を受けたるも死傷なし、又第六十四號水雷艇、第六十六號水雷艇には少許の損害あり其他は皆無事なり。

（備考）敵は損傷せし戰鬪艦以下にハ、至急修理を施し、又港口閉塞は辛ふじて戰鬪艦を通過し得る程度ヨ開通したるものと認む。

東鄉聯合艦隊司令長官報告六月廿六日午前大本營着電に曰く、聯合艦隊は一昨二十三日旅順口外に於て敵艦隊を攻擊せり、此日早朝より敵艦隊（戰鬪艦ペレスウエート、ポルタータワ、セワストポリ、裝甲巡洋艦バヤーン、巡洋艦パルラダ、デアナ、アスコリド、ノーウヰク）は、數隻の掃海瀉船を先頭とし、漸次港外に出でんとするもの〻如く、封鎖勤務にある我哨艦は、無線電信を以て其擧動を警報せり爰に於て敵の出動に對する豫定計畫に基き各方面にある諸隊は直に發動の準備を整へ、在泊せし艦艇は、逐次に出港して急速旅順口に向ひ、特別任務にある艦艇の外我艦隊は悉く豫定位置に集中せり。

是より先き第一驅逐隊（司令海軍大佐淺井正次郎）第四驅逐隊及第十四艇隊等は、港外にありて終始敵の動靜を監視せしが午前十一時頃に至り、敵艦隊は戰艦ツユサレーウヰチ、レトウヰザン、ポベーダを加へ、全力悉く港外に出現し、其數多の掃海船艇は、我機械水雷敷設面を航破して漸次に通路を開かんとするを見、屢々近きて之を妨害し、午後三時頃第四驅逐隊、第十四艇隊は、此掃海を掩護せる敵の驅逐艦七隻と砲戰して之を擊退し、其一隻我砲彈の爲めに、火災を起し港内に逃入せり。

次で敵艦ノーウヰク、其驅逐艦を掩護する爲め、近き來りて我を砲擊せるを以て、我驅逐隊艇隊は、遂に退却して戰隊に合せり、之を當日戰鬪

の發端とす、然るに敵は其掃海を急行し、敵の艦隊はノーウキクを失頭とし、掃海瀕船の後方に隨ひ、沖合に出て來り、午後四時過ぐるの頃第三戰隊は、其部下を集團して、敵と觸接を保持し、漸次に之を南方に誘致せり。

敵は始めは南東の針路を取りしが、次て正南に變針するが如くなりし、此時第一戰隊は遇岩の南方に於て、尚敵の視界外にありしが、先づ驅逐隊水雷艇隊集合して、襲擊準備を爲さしめ、徐ろに敵の洋中に出るを待ちしが、午後六時十五分に至り、始めて敵艦隊を明に遇岩北西約八海里に見たり、敵は「ッエサレーウキチ」を先頭とし、戰鬪艦を前に巡洋艦を後に、十隻の單縱陣をなし「ノーウキク」及驅逐艦七隻を右側に置き南に向へり、我艦隊は戰鬪旗を掲げて、戰機の熟するを待てり、午後七時三十分、彼我の距離一萬四千米突に入り、我艦隊は敵の艦列に對し、倒さに「ィ」の字を畫きしが、敵は次第に右方に針路を轉じ、我と同方向に進まんとするものの如く、我も少しく右方に轉針して、終始敵の先頭を壓せり、然るに午後八時を過ぐるの頃、敵は遂ひに針路を北方に反轉し、旅順口に向ふ如くなるを以て、我艦隊は一齊に右八點に回頭し、横陣を以て暫らく之を追ひしが、時將に日沒（八時二十二分）に近く水雷攻擊の時機漸く熟せしを以て、午後八時廿分驅逐隊、水雷艇隊に襲擊を命じ同時に艦隊は左八點に回頭して單縱陣に復す、各驅逐隊水雷艇隊は、直に我艦隊の後尾を過ぎ、疾風の如く敵に向て進めり、午後九時三十分の頃、第十四艇隊は港外約五海里に於て、敵艦隊の後尾に對し、既に第一の襲擊を試み、第五驅逐隊之に續けり、敵の艦隊は倉皇順序を亂し、旅順口に向ひしが、遂に港内に入る能はずして、午後十時三十分の頃、皆港外蠻子營砲臺の前面より城頭山の下に投錨せり、之より終夜我驅逐隊艇隊は、敵艦隊及敵要塞の無數の探海燈と猛烈なる防禦砲火を冒して。天明に至る迄、連續前後八回餘の襲擊を爲せり、此襲擊中奏功を確認し

白鷹ペレスウエートを撃沈す

たるは、午後十一時卅分頃、鮮生角方向より、迂回して急進したる第十六艇隊の攻撃にして、若林少佐の指揮せる白鷹は「ペレスウエート」型と見へたる敵艦の艦首に對し、斜に二個の水雷を發射し、同艦の大火焔を揚げて、轟沈せるを目擊せりと云ふ、其他の効果に就ては、敵防禦砲火の音響激甚なりしと、海面を打てる敵彈に依り、無數の水柱上りし爲め我艦艇より確實に之を認め得たるものなし。

翌日天明港外を偵察したる第四第五驅逐隊其他哨艦の見る所を綜合すれば、敵艦隊は數に於てペレスウニート型戰艦一隻を減じ、外にセワストポリ型戰艦一隻、ヂアナ型一等巡洋艦一隻だけは、自力にて航行し得ざるたけ、損害を受けたるものと認む、蓋し當夜月明かにして、襲擊に便ならざりしと、敵艦の碇泊陣列我發射線に對して、狹少の正面を顯はしたる爲め攻擊の効果は多大ならざりしも、我攻擊隊に於ても、敵砲火の猛烈なりしに拘はらず、損傷意外に少なく、第一驅逐隊の白雲は敵彈に

白雲の損傷

士官室を破られ、火災を起し、同時に舵機を損し下士卒三名戰死し、宮川少軍醫外下士卒二名負傷し、第十四艇隊の千鳥は、其後部瀛罐室に炸發せざる巨彈を受けたると、第二十艇隊の第六十四號艇第十六號艇隊の第六十六號艇が少許の損害を受けたると、第十二艇隊の第五十三號艇の准士官一名負傷したるに過ぎず、各戰闘の諸艦に至りては素より損傷なし、此戰闘に於て聯合艦隊が少許の損害を以て敵を屈したるもの一に、大元帥陛下の御稜威に依る。

二十四日、旅順口港外の敵艦は、或は曳られ或は自力にて、順次に港内に入り、午後四時頃城頭山下に擱座せりと見たる一隻の入港するを最後として、港外亦隻影を見ず茲に於て聯合艦隊の諸艦は、再び豫定の配備に就けり。

此戰闘の概況は、疾に報告せしも、今各方面の配備にある諸艦よりの報告を得たるを以て、之を綜合し茲に詳細の報告を呈す。

六月廿四日

敵士官捕獲

臺北九戰死者眞野海軍少佐の葬儀を東京にて行ふ。

二十五日午前大本營着電黑木大將の報告に曰く、今二十四日朝、沙子崗嶺に於て、狙擊第二十四聯隊少尉フォーシュマン及兵卒一名を捕獲せり彼の言に依れば、ケルレル中將はウアリエンジに在る狙擊第六師團長に命するに、黑木大將の軍は、岫巖方面より鳳凰城方面へ運動する模樣あるにより、之れを偵察すべきを以てし、之れが爲めに少尉ハ派遣せられたるものなり、又敵の陣地はウアリエンジ東方約四里、トウマレリウカ東方の高地にして、堅固なる防禦工事あり、野砲二中隊なりと。

連山關附近には狙擊第三師團ありと雖ども其位置確實あらず。

本日朝ッンゴアーザ(雪裡店の西北約二里)附近にて、狙擊步兵第二十四聯隊中尉ヤウオスキー及下士一名を殺し死躰は埋葬せり中尉も同じ任務よて出でたる由、前記少尉に語れり。

山本海相參內。

六月廿五日

六月廿六日

各黨派の領袖帝國ホテルに會し戰時戰後の經營に就き協議す。

露帝室の會堂及謁見室に爆發機を發見すの報あり。

露國太平洋艦隊及新造艦乘組武官新任の報あり。

山口福岡二縣大雨出水し人蕃家屋の損害少からず。

山陽、九州兩鐵道の一部汽車不通となる。

聖上日曜出御。

第八回大本營會議。

クロパトキン將軍本國に四軍團增兵を要求す。

寺內陸相邸の晩餐會。

六月廿七日

クリューゲル將軍の病勢危篤の報あり。

巴里にて公債六億法の應募結了。

皇后陛下聯合艦隊に令旨を賜ふ。

皇太子殿下近衛司令部へ行啓。

分水嶺占領

分水嶺占領詳報

小村外相、日韓両國民二十ケ年間通漁の件を告示す。

獨逸清國洞庭湖其他の租借を清國に強制す。

大孤山上陸軍報告六月廿七日午後五時廿分大本營着電に曰く、上陸軍は廿七日午前五時より、十一時に亘る激戰の後ち、分水嶺（岫巖西北方約九里）を占領す、敵は潰亂して析木城方向に退却せり、敵の兵數は歩兵五大隊、騎兵二聯隊、砲十六門なりき。

大庭少佐戰死し、其他死傷百名内外なるべし。

六月二十九日午前大本營着電大孤山上陸軍報告に曰く、大孤山上陸軍は分水嶺占領の目的を以て、三縱隊を爲り、二十六日より其行動を開始せり、即ち淺田支隊は揚胖溝より、分水嶺に、鎌田支隊は大桑峠より敵の右翼に、丸井支隊は接官听より迂回して敵の右側背に向ふ、同時に東條支隊を以て丸井支隊の背後を掩護せしめたり。

東條支隊は此任務を以て前進し、二十六日上哈蹬周家庄の線を占領せる敵を攻撃せしに、該地の敵は歩兵約三大隊騎砲六門機關砲二門を以て堅く陣地を占領し在り該支隊は今日午前五時より敵と對戰して夜に入り戰闘隊形の儘露營せり。

二十七日夜半より東條支隊は更に攻撃に着手し、終に之を撃退し、其陣地を占領せり、然るに敵は午後に至り約三大隊砲十門の増援を得て、屢々同支隊の奪取せる高陣地の回復を試みしも、悉く之を撃退し、午後七時半迄砲戰を續けたり。

丸井支隊は廿六日夜接官听に達し、一部隊を以て下哈塔の敵（東條支隊に對せしもの）の側背に迫らしめ、主力は廿七日午前三時より分水嶺に在る敵の背後に迂廻する爲め前進せり、然るに二道溝附近に在りし敵の歩兵約二大隊の爲め抵抗を受け、午前十一時之を撃攘して三道勾に達せり。

淺田支隊は、二十六日王家堡子附近を防禦せる敵の歩騎兵約二千を撃退

し、同夜瓦房店、分水嶺東麓）以南にて夜を徹し二十七日午前五時より先づ砲戰を開始せしも、敵は堅固なる砲臺内に於て巧に應戰し、殊に既知の射距離を以て彈雨を集注せしを以て我砲兵は一時苦戰せり。

恰も好矣二十六日夜半より敵の右翼に迂回せる鎌田支隊は、弟兄山（分水嶺の南）腹を守備せる敵の歩兵約二中隊を擊攘し、午後七時以後辛うじて砲兵を同地に配列し、全く側面より分水嶺の敵を縱射し、歩兵は弟兄山中より續々敵の側背に迂回せり。

又淺田支隊より派遣せし深谷聯隊も、廿六日夜半より運動を開始したり午前七時揚屏溝西方高地に在りし約二中隊の敵を擊攘して、敵の左側背に迂回せり、於茲敵は全く其の行動の自由を失し、午前七時五十分其砲兵先づ沈默し、同じく八時頃より全線の動搖を始めたり。

敵の正面に向ひし淺田支隊の歩兵は工兵の援助を以て敵の副防禦を破壞しつゝ前進肉薄し、午前十一時半分水嶺山頂を占領し、砲兵を以て猛烈に敵を追擊せり。

敵は松坨子に在りし糧秣倉庫を燒棄し、潰亂して柝木城方面に退却せり捕虜將校六、下士以下八十二敵の遺棄せし屍體は、田間谿谷に點在し、其數を判別し難きも、本道上に遺棄せしものにても九十を下らず。

柝木城街道附近に於ける我戰死將校は、大庭歩兵少佐にして、其他死傷下士以下約二十名、東條支隊にて約五十名なり。

分水嶺の敵地は柝木城街道の關門として、約三ヶ月間敵の全力を盡して搆成せし半永久築城なるを以て、砲臺、歩兵塹壕、廠舍交通路、露營の設備等完備せり、加ふるに正面前には鐵條網鹿柴を以て堅固に守備し、到底正面攻擊のみにては攻擊し得ざるものなり。

然れども淺田支隊は正面より巧みに動作し、各縱隊は漸次敵の退路に迫り、終に此堅固なる敵地を攻畧することを得たり。

捕虜其他に就て、知り得たる敵の兵力左の如し。

旅井支隊の正面に位置せし敵は、五月廿七日夜、豫備歩兵二大隊、分水嶺に位置せし敵は狙撃歩兵第二十一聯隊、イルクック豫備歩兵二大隊、シベリヤコサック第七聯隊、ウエルフネジンスク第一聯隊半部、シベリヤ豫備砲兵第二大隊、ゴーチー歩兵第七大隊、騎兵九中隊砲兵二中隊。

東條支隊に對せし敵は、二十六日以來豫備歩兵の三大隊、マチツンスク騎兵第一聯隊、ウエルフネジンスク第一聯隊の半部、サバイカル騎砲兵第一中隊、及機關砲二門にして、二十七日午後より至り歩兵三大隊砲兵二中隊を增加せり、

七月二日午後七時大本營着電東鄕聯合艦隊司令長官報告の要領左の如し

第十二水雷艇隊(司令海軍少佐山田亨)は、六月二十七日夜、旅順港外にある敵の哨艦に對し攻擊を行ひたり、其報告に據れば、同夜我艇隊は、旅順口港外に進航せしに、敵の覘知する所と爲り、探海燈の熾なる照射と、砲臺軍艦の猛烈なる射擊を冒し、黃金山下にある二檣、三煙突の敵哨艦(戰闘艦又は一等巡洋艦おちん)を襲擊せしに、該艦は水柱を揚げて轟沈せり、此時敵の驅逐艦と、我を攻擊し來りしを以て之と砲火を交へたりしが、其内一隻は、艦腹を現はし、白煙を揚げながら轉覆沈沒せり、之れ各艇が齊しく敵の探海燈光の下に明認する所なりと云ふ。

此の攻擊中戰死海軍大尉權藤黨義以下十三名、負傷海軍中尉矢野祐太郎以下二名なり。

伏見宮貞愛親王を陸軍大將に、有栖川宮威仁親王を海軍大將に新任。

宮中にて後備歩兵某聯隊に軍旗親授式を行ふ。

憲政本黨時局問題に關し、評議員臨時聯合會を開く。

五百七十餘名の定期叙勲を行ふ。

英國海軍中將ノーエル東洋艦隊司令長官に任せらる。

露國潛水艇デルフイ號沈沒溺死者二十餘名。

宮中賜宴(大本營陸軍幕僚五十二名)

敵驅逐艦轟沈

六月廿八日

六月廿九日

浦塩艦隊元山來襲

宮中にて御節折式あり終て大祓施行。

滿洲軍司令部大山、野津、兒玉、福島及某軍の佐尉官に拜謁仰付らる。

大山、山縣、桂、兒玉、寺内參謀本部に重要事項の協議を爲す。

佐渡丸浮上り高砂丸に曳かれて長崎の船渠に入る。

露艦元山沖に現はれたる爲元山航路禁止さる。

クルレル中將西比利亞第二軍團長新任の報來る。

近衛第二両師團の負傷將卒新橋に着。

三十日元山發外務省着電に曰く。

(一)露國水雷四隻今朝五時三十分入港せり。

(二)露國水雷は都合五隻にして、猶沖合に三隻の軍艦らしきもの見に居れり。

(三)露國水雷艇は(今三十日午前六時廿分)居留地を砲擊しつゝあり。

(四)露國水雷艇六隻午前六時四十五分(三十日)砲擊を止め、碇泊中の小蒸氣帆船各一隻を擊沈し、七時廿分港外に去れり。

(五)露艦は軍艦三隻水雷九隻驅逐艦らしきもの一隻にして、九時半安邊沖を東南に向て去りつゝあり。

(六)露艦砲擊の爲め居留地の受けし損害ハ極めて些少なり、小蒸氣は仁川堀久所有のコウウン丸帆船は、昨夜北海道より入港せし清沙丸にして居留地の受けし敵彈は二百發内外ならん。

(七)擊沈されし清沙丸(百十五噸)乘組員の言に據れば、廿四日頃城津沖合にて探海燈に遭へりと、居留民は目下避難中なるも皆無事。

六月三十日大本營着電に曰く。

(一)本日午前六時元山港へ敵の水雷艇四隻入來り、居留地を砲擊す、間もなく其水雷艇は六隻に增せり、尚ほ沖合に軍艦三隻あり、元山京城間の電線は午前六時十二分より不通となれり。

(二)本日午前十一時五十分京城への電信は開通せり、敵は其後小蒸氣一

を擊ちて燒き沈め、又帆船二を擊ちて燒き、水雷艇六は逐次港外に出で一旦葛麻浦の岸に集まれり敵の總數は軍艦三（ロシヤ、グロモボイ、リーリツク）驅逐艦らしきもの一、水雷艇九にして合計十三隻なり。これより敵は一旦北に向ひしも更に南に來り、港外に皆集まり居りしが十時三十分より雨強くして如何になりしや見えず、敵の射彈は百八十餘にて居留地には多少の損害あり、

六月三十日元山領事發電に曰く、本日午前十時過より驟雨甚しく、濃氣の爲め一里の外を見る能はず、一時再び港内に向はんとせし露艦らしき軍艦三隻は、遂に北行したるものゝ如し、目下の形勢にては平穩なる事と認めたるにより、守備隊長と協議の上、避難民をして一先づ歸還せしむる事とせり。

露艦の砲擊により兵士二名、韓人二名、微傷を被むり、領事館官舍は一彈を受け、居留地各區中にも敵彈を受けたるものあり、火災三ヶ所に起りしも直ちに消止めたり、何れも些少の損害に過ぎず。

明治三十七年八月十一日印刷
明治三十七年八月十五日出版

定價金二十五錢

東京赤坂區中之町二十二番地
編輯兼發行人　松本隆海
全京橋區元數寄屋町一丁目一番地
印刷人　日下部純次郎
全京橋區元數寄屋町一丁目一番地
印刷所　大成社
全赤坂區中之町二十二番地
發行所　巖廼舍

不許複製

大賣捌所
東京市京橋區鎗屋町十四番地
北隆館書籍雜誌店
電話新橋（三〇七九）電信暗號（〇ヰ）